握手

抄録ニューギニア戦線

佐々木衛士　著

目次

一　出征……6
二　旧友……11
三　航海……15
四　下士官……18
五　ロマンス……24
六　天長節……34

七　友人の戦死……40
八　毒草……44
九　遺骨……47
十　部下……52
十一　童貞……57
十二　物量の差……64
十三　椰子と鰐……68
十四　満期帰還……71

十五　男色……74
十六　犯罪……80
十七　回想……86
十八　学徒将校……94
十九　奇襲……99
二十　捕虜……103
二十一　刺青……110
二十二　最前線出動……117

二十三　残留隊の正月……122
二十四　發病……126
二十五　病院船……132

一　出征

昭和十八年（一九四三年）三月の、水戸の薄暮は寒かった。

灯火管制下の暗い駅のホームに、歩兵聯隊（れんたい）の将校団が一列に並び、出身中隊の見送りの兵隊が、上野行列車が汽笛を鳴らして始動すると「頭（かしら）、中（なか）ッ」と、車窓から乗り出して居る三名の見習士官に敬礼をした。

戦地に赴任する隠密の出発なので、三名の縁者等の見送りは無く、毎度乍らの粛々（しゅくしゅく）とした出発であった。

将校団や中隊の兵隊に、見習士官は眼を凝（こ）らして答礼したが、薄暗い照明の中に、親しい顔の識別は困難であった。

列車はやがて速度を増し、偕楽園や千波沼も遠去かって行った。三名は軍刀を腰から外して、座席に着いた。いよいよ戦地へと言ふ懐ひで、夫々は言葉も少なかった。

瞑目して笹森見習士官は、今日に到る一年半を回想した。

昭和十六年秋の、学生に対する徴兵猶予の廃止、それによる徴兵検査での第二乙種合格

十二月八日の日米開戦

十二月末の、学制最初の繰上げ卒業

十七年一月早々からの会社就職

二月一日の一斉召集により、甲府聯隊へ二等兵として入隊、三ヶ月足らずの初年兵教育、その間、甲種幹部候補生に合格して伍長に進級、聯隊における甲幹教育

四月に豊橋予備士官学校入学、八ヶ月間の猛訓練を受け、同年十一月卒業

将校待遇の見習士官となり、野戦要員として甲府の原隊へ復帰、年も押し詰まってから水戸歩兵聯隊へ転属

十八年二月、水戸聯隊から宇都宮聯隊へ派遣され見習士官の集合教育、其の最中に、戦地聯隊への転属が決定して急遽（きゅうきょ）水戸へ帰隊。翌日、応召後初めて三日間の休暇を与へられて帰宅

聯隊に戻って数日間、中隊で待機中の今日午前、「本夕刻十七時、水戸駅出発」の命令、赴任先は秘密事項で不明のまま。併し、支給された被服が夏物なので、南方戦線とは予想された。

それで、三日間の帰宅の折、笹森は両親に戦地からの葉書の冒頭に、拝啓ならヒリッピン、謹啓ならスマトラ、前略は　ビルマ等と親子間の暗号を決めて来たのだった。

列車は三時間余の九時過ぎに上野駅に着いた。

開戦から一年半を経過し、ガダルカナルは既に落ち、勝った勝ったの戦勝気分は薄れて、

女性はモンペ姿が多く男性は詰襟の国民服で、誰も余裕の無い足取りで往来し、非常時意識が浸透して居る気配であった。

ホームから山手線への乗換階段を降りた時「勝弘さんッ」と笹森は呼び止められた。見ると其処に、疲れた表情の中に緊張を漂はせて母親が立って居た。

「ああ、お母さん、どうしたのです？　こんな所に。」

「必ずあなたが此所を通ると想って、待って居たのよ。」

「それでは……」

笹森は帰郷休暇の折、多分何日に出発するか判らないから、出来れば出発の日に何気ないような電話をする、その日が出発した日だと想って貰ひ度いと言ってあり、晝(ひる)に、小物を買ひ足したいからと中隊長の許可を得て外出し、識り合ひの雑貨屋で電話を借りて、

「今、町に用事で出てきたので電話しました。今日の水戸は寒いですよ、お父さんお母さんも身体に気を付けて下さいね――」

と慌しく一方的に喋り、周章して何か言いたげな母の気配に構わずに電話を切ったのだった。

「多分、今日が出発でしょうと思ってね、あれから仕度をして、終列車が着く迄は、此処に居やうと待って居たのよ――」

母は小声でさう言ふと、遣る瀬ない微笑を浮かべた。

仲間の見習士官がそれと察して歩を緩めて先を行くので、笹森は　母親を促して足を早めた。将校行李が重いので、軍刀が足に絡まった。

「随分重さうね、片方を持ってあげませうか？」

「冗談じゃありませんよ、将校がオフクロさんに行李を持って貰って居たら、物笑ひですよ。」

山手線の車中も混んで居た。隅に行李を立てかけて笹森は母と向ひ合って立った。母親はその手を握った。笹森も握り返したが遠い幼時の母の掌と感触がすっかり変わって居て、母親も齢をとったものだと実感した。果たして、何年ぶりの母の掌であったらう……。

周囲に人が多かったので、二人は語り度いことは沢山あったが、語る言葉は出なかった。

やがて、品川駅に着きホームに降りると、下車する小部隊の兵隊も多かった。

停車場司令部から誘導の兵隊が配置されて居て、その指示で軍用列車に近い出口迄、笹森は母親と手を繋いで歩いた。笹森はその奇異な姿が周囲に憚られたが、幸ひ単独の行動なので、せめて一分間でも長く、母に掌を握らせて置きたかった。

「では出発します。お父さん共々、元気で――」

「あなたもね――」

母親は瞳を見せないで、下を向いて言った。そして、出来る限りの力を籠めて手を握った。その頃、

戦(いくさ)する身はかねてから
　死する覚悟で居るものを

と云ふ戦意高揚の軍歌が歌はれて居て、その様な世相の中で、「無事に還って……」とか「元気で征(い)って参ります……」などとは、母子の間であっても、口に出来る風潮ではなかった。それが、当事者にとっての、悲しい世相の倫理であった。

笹森は踵(きびす)を返して、軍用列車の停まって居る暗がりに歩を移した。一度、闇の中から振り返ると、独り小さく、母親が佇(た)って居た。

聖戦に征く軍人と、軍国の母の、空しく哀しい別離であった。

二　旧友

暗い引き込み線の中に、長い混成輸送の軍用列車が入って居た。

停車場司令部に行き、水戸聯隊から来た見習士官三名と告げると、手際良い指示で、何号車に乗り同行の見習士官等に合流するようにと言はれ、所定の車輌に乗り込んだ。

「おい、笹森、笹森じゃないか？」

と呼び止められ、見るとK大の同級で机を並べた渡辺が、見習士官として宇都宮聯隊から来て同乗して居た。

笹森は河三五六四部隊の要員で、渡辺は河三五六六部隊であった。

「先刻、此所で上野に逢ったよ。彼も南方に征くらしく、此の列車に乗るさうだ。発車したら探して見よう――」

笹森も渡辺も、思ひがけない邂逅（かいこう）に弾む様な気持になった。兎に角、下関迄は三人が行を共にすることは間違ひなかった。室内灯を遮蔽した混雑する車内で、行李（こうり）の始末などをして居るうちに、列車は汽笛を鳴らすこともなく発車した。

灯火管制で暗くても、何処の辺りと判る東京の街並が、刻々に遠去かって行った。

東京で生まれ東京で育ち、東京で学業を卒へて東京の会社に就職した笹森にとっては、去っていく闇の中の一つ一つの街に係りが有る懐ひで見送った。

一般の客車や軍用貨車の時間帯を縫って、軍用列車はダイヤを可及的に乱さぬ様に、そして防諜の必要上も、夜間に運行することが多かった。

忙しかった出発の疲れから、堅い座席で熟睡し、車輛の軋みで眼を醒ましたら、列車は停車場以外の場所に停車して居た。

既に連絡がしてあって、早朝にも拘わらず国防婦人会の襷を掛けた婦人達が、お茶を用意して車窓に集まって来た。婦人達に課せられた銃後の奉仕なのであった。

「兵隊さん、慰問文を出しますからね、元気で着いて、お手紙を下さい――」

と自分の住所姓名のメモを渡す婦人も居た。こんなことが縁で、目出度く内地へ帰還後に、それらの縁者と結婚する例も珍しくなかった。適齢期の男性が、国内に少なくなった為の現象でもあった。

二十有余時間を費やして、列車は下関に着いた。

此処から輸送船に乗って、いよいよ内地を離れるのだが、何隻かの貨物船が、慌しく石炭や物資を積み込んで居た。

乗船までに三時間ほど暇が有ったので、笹森と渡辺は上野を加へて、街に出ることにした。

上野は東京の聯隊から転属になり、二十名程の補充要員を、下士官が引率して居た。

上野は早く父親と死別し、母の手で育てられ長男であったので、早期の除隊を期待して、幹部候補生を志願せず、一等兵での出征であった。聯隊では中隊事務所に勤務して居たので引率の下士官とは気心が通じて居たらしく、笹森が下士官に事情を話して外出の諒解(りょうかい)を求めると、気易く承諾をした。

当時の下関は、日本を離れる最後の基地の一つであって、将兵の、何時間かの外出の姿が見られる以外は、一般の人影は少なかった。夫々(それぞれ)が銃後の勤めとして何れかの職場に入って居て、索漠とした空気が漂って居た。

日本の都市との暫くの別れといふ感慨で、初めての土地を三人は、行く先の当ても無く歩いて居た。何処を通っても、狙撃や爆撃を受ける虞(おそれ)の無い此の時間が、貴重な一刻のようにも思はれた。

痩せた野良犬が横町から走り出て、電柱に習性の用を足すと、何事も無い様子で次の横町へ入って行った。

平素は気にも留めぬ風景だが、銃後の平穏な点景の一つとして、笹森は眺めて居た。

兎に角、腰を降ろして話そうと、一軒の茶店に入った。老婆が一人で店を守り、乾燥バナナと昆布茶が置いてあった。

「兵隊さんも、もうすぐ船に乗って戦地に征くのですねえ……。私の息子も二度目の召集

で二年前に出征したのですが、今、何処に居るのか便りも無いんですよ……。」と昆布茶のお替わりを持って来て呟いた。

特別な話や目的を持った外出ではなかったが、旧友だけの心の休まる一刻を過ごすことが出来たのが、三人には嬉しかった。

去年の師走に第一回繰上げ卒業で学窓を離れた仲間は、殆どが翌年二月一日に召集され、一年を經た此の日迄に、既に戦地に在る者も多かった。誰彼の出征した日や、征った方面を、三人は識る限りを話し合ったのだが、中には既に戦死した者も居るとの噂であった。

現に、中学を卒業して直ぐ陸軍航空士官学校に進学した笹森の親友三島は、卒業して少尉に任官し、大陸に赴任して幾許も無く、戦死したことが報らされて居た。

戦争と云ふ殺人鬼が、容赦なく青年の身に迫って居るのだった。

三　航海

輸送船団は六隻の編成で、一五〇〇屯（トン）級の、何れ劣らぬ老朽の貨物船で、乗船後、パラオに直行すると知らされた。

笹森、渡辺、上野の三人は未だに運命の堅い糸に結ばれて、倖ひに同じ船に乗ることが出来た。

上野はパラオ経由でラバウルに行く旨を告げられたが、笹森と渡辺は、パラオ以降の行先は不明であった。

船内は各隊の寄り合ひなので、雑然としては居たが、却って格式ばらず、将兵共、気楽な気分が感じられた。いづれにしろ、上陸する迄は、波まかせ船まかせの旅であった。

港を出て半日程は、船団の上空を友軍機が旋回して、敵の潜水艦を警戒してくれたが、海洋に出れば危険が薄らぐので、飛行機は船団に向かって四、五回、翼を振って別れを告げると、一直線に基地へ還って行った。

輸送船の一団は、最も老朽した船に同調せねばならぬので、六、七ノットの低速で、而も航跡を短くする為に、左右に蛇行して実に緩慢な航海であった。

航行は平穏で、下段の船艙には一区画を仕切って、ラバウルに行く慰安婦が三十名位乗って居た。兵員との境界は、厳重に天幕を張ってあったので、中の動静は判らなかった。

国家の為と云ふ至上命令の軍人と、同じ危険な場所に行かねばならぬ境遇の娼婦等と、一つの船に乗り合す運命を、笹森は、人生の不可思議な巡り合せと思ふのだった。

上野は、慰安婦を送り込む余裕があるのなら、ラバウルは未だ安全なのであらうと、心を休める一助にして居た。

晴天で凪(なぎ)の一日、対潜監視をして居た船舶部隊の見習士官が、水平線の彼方に潜水艦の航跡を発見したと緊急呼集を発し、船内が騒然と緊張した。

輸送司令官と船長が、急遽確認したところ、それは鰹の大群であることが判明し、即刻、警報は解除された。

確かに、船の前方に五〇米ほどの幅で、白浪を立て乍ら近づいてくる一団があり、それを潜水艦の航跡と早合点したのだが、それは重なり合って近づいて来る鰹の大群なのであった。

船員の指導で、将兵は甲板に集まり即席の釣竿で糸を垂らすと、大きな鰹が入れ喰ひに、続々と甲板に釣り上げられた。

漁船が斯(かか)る鰹の大群に遭遇すると、一度で財を成すとのことであった。

船団の全員は、図らずもその夜は、新鮮な鰹の刺身で満腹し、翌日は飽きる程、煮付け

の鰹を食わされた。

併し乍ら、鰹の大群を潜水艦と誤認した見習士官には、白晝、船団に一直線に近寄るのではなく、横一文字に白浪を立てる水脈を、潜水艦と間違えたことに、沈着冷静さを欠いたものと、見習士官なるが故の経験不足と其の措置に、非難が囁かれた。

将兵のひそやかな誹謗の声が笹森の耳にも聞こえ、おなじ見習士官として肩身が狭く、秘かに自戒をしたのだった。

四　下士官

船艙の柵の隣に、兵長や下士官数名を補充要員として引率する曹長が居た。

沈鬱な感じで落ち着いた態度が、歴戦を物語っては居るものの、部下と特に語り合ふでもなく、歩兵操典などの兵書を読んで居る時が多かった。

彼は常に笹森を意識して居て、それとなく笹森の言動に注意して居るのが感じられた。狭い場所で何日か、共に暮らすのだから、起床時にその日の挨拶ぐらひ述べるのが自然なのだが、敢えて顔を合せることを避け、敬礼を行ったことが無かった。

笹森はその欠礼に腹が立って居たが、直ぐに別れる他部隊の下士官なので、咎め立てをしなかった。

笹森が航行の様子を見ようと梯子を登りかけると、珍しく曹長が

「見習士官殿、自分も甲板に出て宜いでせうか?」

と硬い表情で声をかけた。甲板には、将校のみが自由に出られるのであった。

「ああ、俺に用が有るなら、差し支えないよ。」

笹森は気軽に応じた。

「太洋は気分が快いですねえ……」

曹長は笹森に並んで、深呼吸をした。

「ところで見習士官殿は内地から直行ですか？」

「さうだ。初めての野戦だよ。」

「それでは、去年、大学を出た組で？」

「ああ、ぴかぴかの新米だ。」

「それなら、敵の鉄砲玉も喰ったことが無い訳で――。これから、苦労をしますよ……」

曹長は尊大な態度で言った。

「当り前だらう。楽をしやうと戦地に来る訳はないじゃないか。」

不遜な曹長の態度に、笹森も挑発に応じる口調になった。

「でも、羨ましいですよ。一年で将校さんなんだから……」

笹森は軍隊に入って以来、階級社会の厳正であるべき規律に、陰に陽に相反する不愉快な思ひを屡々（しばしば）味わった。

此の曹長は、娑婆気の抜けぬ見習士官が、暇な船艙で操典類を勉強するでもなく、気易く兵隊と冗談を交わしたりする姿が、軍律の弛緩のように思へて、乗船以来、批判と反感と羨望とを抱いて居たのだった。

「併し曹長、軍隊は上下助け合ふ規律の正しい社会だから、経験或は技術等、不足する部

分はお互ひに補ひ合って生活するのだらう。将校だって下士官兵に頼らなければ任務は遂行できないだらうし、将校が居なければ指揮系統が成立しないし……」

曹長は黙ったまま、暫く言葉を継がなかった。笹森も自分の直属の部下でもない下士官と、深く語り合ふ気持はなかった。

やがて、思ひ直した様に曹長は、

「さう判ってくれる将校さんだけなら良いんですがねえ……」と呟いた。

そして、あらためて、

「此の船には、ピー（慰安婦）が乗って居るでしょ。女達は、夜に将校の相手をして居るんですか？」

「えっ、何だって？」

「見習士官殿も、夜、そっと甲板に上がって行くことがあるし、あの連中だって商売はし度いだろうし――」

「馬鹿なことを言ふな。何時襲撃されるか判らない輸送船の中で、そんな軍規を乱す行為が行はれて居ると想って居たのか？　お前はそんな眼で俺を見て居たのか？」

軍歴は兎も角、正当な階級の権威は示さねばならぬと、笹森は曹長を怒鳴りつけた。その気迫に圧されて、

「済みませんでした、見習士官殿。暑苦しい船艙に居ると、遂、くだらない想像をしてし

まって――」

「兎に角今夜、俺と一緒に甲板に上って来い。曹長は未だ、南十字星を見たことが無いだらう。俺は毎晩、星を見乍ら、未だ見ない戦場のことを考へて居るのだ。経験が無いから、図上作戦ではないが、南方でこんな戦ひはどうとか、あんな場合はどうとか……」

「済みませんでした。僻見で勝手な想像をして……。」

曹長は真実、申し訳なく思った様だったが、今度は表情を換へて、

「見習士官殿、気分を直して、之でも見て下さい……」

曹長は上衣の内懐から、汚れた厚い手帳を取り出した。渡されて開いて見ると、どの頁にも女性の姓名と場所、年月日、時には写真も貼ってあり、更に体毛を添えてあった。

「自分は、男として千人斬の悲願を立てて居るんです。其所に番号が書いてある通り、八百三十二人迄行って居るんです。此の船には三十人位乗って居るので、出来れば頁を増したいと考えて居ました――。」

生命を保障されぬ戦地に居ると、内地では考へられぬ生活があるのだらうと、褒めも貶しも出来ずに曹長を眺めた。その表情を窺って、

「見習士官殿、馬鹿な奴だなんて思はないで下さい。激戦から命を助かって陣営に帰り着くと、生きて居た証據として女の所へ行くんですよ。ピー達も、死にに行く者達を相手にし続けて居るので、生きて還れた者には、親身な気持で喜んでくれるんです。同じ人間

同士ですから……」

笹森にも、生死と性の関連が判るように想へて頷いた。

「自分はこれでも、中支、北支と転戦し、随分手柄を樹てた心算なんです。だから、今度も選抜に合格し、激戦の南方に廻されたと想って居ます。次の恩賞の〆切には、必ず金鵄勲章を貰へると思って居るんです。」

「立派なものだ。自分に恥じない戦闘をして居るなんて――」

問はず語りに曹長は、家庭の事情から志願兵となり、一生軍隊で身を立てる覚悟で居ると胸を張った。訊けば彼は、笹森と同じ年齢であった。併し、經て来た人世の体験は、比較も出来ぬ隔絶したものであったのであらう。

「曹長、立派な決意だと思ふよ。今後も一層お国のために働いてくれよ。俺も敗けずに、同じ覚悟で軍刀を吊って居るのだから――」

初めて交わした対話であったが、曹長は虚飾のない笹森の対応に、納得できた様子であった。

「自分はそろそろ船艙に戻ります。お陰様で甲板に出て潮風を吸ひ、昔の女の写真を眺め、さっぱりした気持になりました。

退屈した時に見る様に、その写真帖を貸しませうか?」

「冗談じゃない。結構だよ。見ても妬けるばかりだからな。

併し、曹長、次回の叙勲で金鵄勲章は貰っても、他人に言へぬ勲章（病気）は貰ふなよ。」

「言ひますねえ、見習士官殿も。では、自分は頑張ります。見習士官殿も、お元気で頑張って下さい。」

曹長は厳粛に挙手の礼をしてから、笹森の手を固く握った。逞しい太い指であった。

図らずも笹森は、内地と戦地の隔りを、具体的に識らされた懐ひであった。

それ以来曹長は、親しそうに厳正な挙手の敬礼をした。

五　ロマンス

順調に航海が続き、明朝パラオに入港するが、快晴で凪(なぎ)の為、潜水艦の魚雷攻撃の虞(おそれ)が多い。充分に脱出の準備をする様にとの警報が、夕食時に達せられた。

兵隊達は渡されて居る救命胴衣を点検したり、船艙から甲板へ出る仮設の梯子(はしご)を補強したりした。

笹森は装備を整へ、頃合ひを見て渡辺に、

「上野と一緒に、甲板へ出やう――」と誘った。

甲板上の船室は、将校室になって居たが、甲板には人影が無かった。

海上は全く静かで、十三夜位の月が、南海に金波銀波を撒いて居た。併し、海は荒れて居る方が潜水艦からの攻撃が六ヶ敷(むつかし)く、時刻としては日の出、日没時が、陽光をバックに魚雷を射ち込まれる危険が多いのだった。

遅い船足ながら、船団は一刻一刻と危険水域に近着いて行った。

三人は明るい月光の下で、共に過ごした愉(たの)しかった学窓生活や、これからの人生の希望等、友人ならではの話に、花を咲かせた。

併し、過去に豊富な話題が残って居ても、将来については、自分の意志による計画を語り得ない境遇の三人であった。軍隊とは運隊であるとの比喩があるが、一瞬の運命によって明暗を分ける生活に、何が待って居るか知り得べくもなかった。

「ああ、鰹節と氷砂糖が有る。オフクロが持たせてくれたんだ。三人で分けやう。」

と上野が雑嚢から取り出した。遭難した時の為の、母親の配慮の品であった。

三人は母校の校歌や応援歌を歌った。どの歌にも、その時々の、多感な想い出が詰まって居た。

幾つもの歌を歌ひ盡くし、最後に、W大との対校戦で勝った時にのみ歌ふ応援歌を歌った。

平素、勝利の躍動の中で、学生は隣同士、識るも識らぬもお互ひに肩を組み、身体を左右に靡(なび)かせ乍ら歌ふのが慣例の歌だったので、三人は肩を組んで、

新しい時代(よ)の鐘が響くよ
　若人の胸は踊るよ　踊るよ
ああ華やかに若き命を
　声張り挙げて　歌ほうよ

と合唱した。併し、あの神宮球場で、勝利に酔ひ痴れて歌った歌が、今宵は哀調を帯びた余韻しか残さなかった。

口には出さなかったが、三人の胸の内には此の歌を歌ふのもこれが最後かもしれぬと云ふ憂ひが、蟠(わだかま)って居た。沈みかけた気分を引き立てる様に上野が、

「お互いに、何かロマンスが有るだらう。それでも話し合ほうや――」と言った。

「それなら上野、〝隗(かい)より始めよ〟だ。例の、K学園の女学生とは、お別れをして来たのかい？」

「お別れも何もあるものか。毎朝、同じ電車で通学しただけで、一度も言葉を交わしたことも無かったのだから――。就職と入隊で一年以上も姿を見ることが出来なかったし――。

今度、出征の為の帰宅の折に、彼女の通学する電車に乗ったんだ。直ぐ、僕のことに気が付いて、側に来て立って居たが。

〝今度、僕は戦地に征くんです〟と言ひたかったが、電車は混んで来たし、そのまま下車して、目と目を交して左右に別れたよ。結局、学生時代の、想い出に遺る女性と云ふだけだろう……」

「とにかく上野は、今朝は逢へたとか逢へなかったとか、毎朝の期待だったのだからなあ。」

「それは、笹森の方から訊いたからさ。併し、白い線が流星の様な制服の、原節子に似た美人だったよ。」

「それでなあ渡辺、上野は原節子のブロマイドを、何枚も買って居たんだぜ」

「へえ、女優や俳優のブロマイドなんて、ミーちゃん、ハーちゃんが買ふものと想って居

たが、上野が買って居たとは知らなかった。それで上野、帰還できたらどうするんだ?」
「彼女の名前は知らないが、学校は判って居るから、卒業名簿を然るべく調べれば、何処の誰かは判るだらう。今の僕には、彼女が一番好ましい女性だけれど、総て運隊の成り行き次第だからなあ……」
「次は笹森だ。当然、誰か居るだらう?」と渡辺が言った。
「俺はね、美人に弱くて惚れっぽいんだ。併し、全然女性に対して臆病でね、直ぐに好感を持っても、話しかける様な勇気も才覚も無いんだよ。」
「笹森、女優になった恋人のことを話せよ」
上野が横から口を挿(はさ)んだ。
「恋人なんて言へるのかどうか……」
笹森にとって、今でも楽しく、心の疼く経験であった……。
彼は予科三年になった試験休みに、母校の病院に入院して、鼻の手術を受けた。
その時、素晴らしい美人の見習看護婦が居て、手術後の治療に診療室に通ふと、笹森の背後から必ず彼女が身を添えて、膿盤を支へた。背中に触れる彼女の血潮を熱く感じて、笹森は呼ばれる診療の時間を、毎日待ち遠しく病室で待って居た。
軈(やが)て退院する日になり、担当医師や看護婦に挨拶に行ったが、彼女は隅の方から笑顔を見せて居た。

笹森はその後も暫く、決まった曜日に治療に通院するのが楽しみだった。或る日、治療を終えて室外へ出ると、追ふ様にして彼女が出てきた。

「私、今日で耳鼻科の研修が終わり、明日からは内科へ移ります……。あの、去年の学園祭に、お友達と行ったのですが、今年の切符を頂けませんでしょうか？」

「勿論、送ってあげますよ。それで宛先は？」

彼女はペンも用紙も持って居なかったので、笹森は自分の名刺と万年筆を取り出した。名刺と一緒に、学生証に貼る彼の小さな写真が出て来た。

「此のお写真、頂いて宜いでしょ――」

さう言うなり、急いでポケットに仕舞ってしまった。そして名刺の裏に、看護婦寮の地名番地と、第〇回生、大原十三子と忽々に書き入れた。

待合室の一隅で、制服のK大生と美しい看護婦が、寄り添って語り合って居る様子を、周囲が関心を以て見て居るのに気が付いて「それでは……」と云ふのもそこそこに、二人は離れた。笹森も彼女も、頬が真っ赤に火照って居たのを意識した。

学業の日程から、風邪気味の身で手術をしたのが障って、退院後の笹森は微熱が続き、肺浸潤と診断され、一年休学をして自宅で療養することになって了った。

半年後に秋が来て、学園祭が近づいた。

折々見舞ってくれる友人のMに、当日の切符を三枚ほど送ってくれる様に依頼した。

「誰が行くんだい？」と訝るMに、「実は……」と事の次第を打ち明けた。

「あの耳鼻科の看護婦だろ、僕も、君を見舞ったときに見かけたが、素晴らしいメッチェンだな。そんな約束をして来たのか……」

と、羨ましそうな顔をした。後日届けてくれたので、直ぐに笹森は〝一別以　胸部疾患に罹り休学して自宅療養をして居ること、約束の学園祭の切符を同封するから……〟と、知らされて居た寮に送った。

期待していた笹森に、三日後、分厚い手紙が届いた。容姿の様に綺麗な文字であった。

其所には〝笹森が病気療養中とのことに驚いた。それにも不拘、学園祭の切符を送ってくれたことへの感謝と、更に、笹森さんが行けないなら、私も今年は行きません。早く元気になられて、来年は是非、案内をして頂きたい。お手紙を頂いて、同期の友達が大騒ぎをして、どんな方かと執つこく訊くので、頂いたお写真を見せてしまひました。御免なさい……〟などと浮き浮きした姿が目に見える様に書かれて居て、笹森としては、初めて貰った好ましい女性からの手紙に、平静では居られぬ感情であった。

興味を持って居たMが、数日後に切符発送の結果を探りに来た。求められるままに返信の手紙を渡すと、読み終わったMは深々と息を吐いて、

「佳いラブレターを貰ったなあ……。どうする笹森？」

「どうもこうも無いじゃないか。療養中の身だし、恥ずかしいが、その手紙を読み返すと、熱が上がるんだ。」

Mは苦笑して「その気持ちは能く分かるよ。」ともう一度、手紙を読み直した。

冬が終わる頃になって、笹森は早めの療養が効を奏して、四月からの復学の目途が立った。そんな一日、Mが少し興奮して訪れた。席に着くなり、

「おい笹森、あの大原十三子が、新興キネマの女優に引き抜かれたそうだぜ――」

と言った。

「何だって？　女優になったって……」

笹森には、晴天の霹靂の懐ひであった。繋がっていた心算の太い糸が、突然切れてしまった懐ひで憮然とした。

元気になって登校したら、訪ねるか手紙を出さうと愉しみにして居たのに、お互に一度だけの片便りで終ってしまった……。

顛末を訊いた渡辺と上野は、

「惜しい結末だなあ――」

と口を揃えた。

「要するに槿花一朝の夢、だったのさ。映画研究会の連中に、新人女優について調べて貰う手は有ったかもしれないが……。今にして残念なのは、彼女の意の篭もった手紙に、僕

が更めて返事を出せなかったことなんだ。病状の為に、重ねて便りを出さなかったことを、彼女はどう想ったか、それが未だに心残りだよ……」

「そして、その手紙は未だ持って居るのかい？」

「ずっと机の中に入れて居たが、召集令状が来た日に、焼いてしまったよ。」

夫々（それぞれ）の懐ひで沈黙が続いた。船の規則正しいエンジンの音のみが、響いて居た。

「ところで、渡辺はどうなんだい？」

「僕はね、おかしな成り行きで出て来たんだ。実は、今度の出征休暇の折、柔道部の後輩が数人で歓送会を開いてくれたんだ。隣の席が内田でね。別に計画的にその機会を待って居た訳じゃないが、僕は彼に、〝若しも俺が帰還出来たら、君の妹をくれないか？〟と言って了ったんだ。勿論、今しか言ふチャンスが無いだらうと思ったのは事実だがね。

内田は吃驚（びっくり）して僕の顔を見て居たが、〝先輩、妹の奴は何と云ふか判りませんが、僕は大賛成です。よろしくお願ひします〟と固く手を握ってくれたよ――」

渡辺は其所迄言ふと。口を噤（つぐ）んで白み行く空に目をやった。上野が更に促すと、

「それがね、いよいよ聯隊に戻る日に、予想もして居なかったんだが、内田と妹が、駅まで見送りに来てくれたんだ。

内田が、妹に僕の言ったことを話したかどうかは判らないが、愈々列車に乗り込む時、幾人もの見送りの人を分けて彼女が近付き〝御無事をお祈りして居ります……〟と小さな

声で言ったんだ。〃有難う〃と言ふだけが精　　だが　一度も手を握ったことも無い仲なのに、何だか婚約して来た様な気持なんだよ……。」

「良かったなあ渡辺、多分、内田が妹に話し、彼女も前から君に気が有ったので、その気持ちを伝へたくて彼女は兄貴と一緒に来たんだよ」

「実は俺も、その様に想ひ度いし、自信も持ったんだ。」

渡辺は照れ乍ら、自分にも言ふ様に断言した。

「結局、渡辺だけが、一番具体的で実現性の有るロマンスじゃないか。」

笹森と上野は、心から渡辺を祝福した。

空はいつしか、暁の色に染って来た。

パラオから来た護衛の駆逐艦が、船団の周囲をフルスピードで航行して居た。遠くに亭々（ていてい）とした椰子林が見えて、南へ来たことを実感した。

船団は蛇行を止め、スピードを上げて港に直進し無事に入港できる気配であった。

「先ず、此処迄は、何事も無かったな。早く船艙に戻らなくては――、兎に角、お互に頑張らうぜ……」

三人は、手と手を堅く堅く握り合った。

併し其の後、笹森は再び二人に、相会ふことは出来なかった。

六　天長節

部隊毎に逐次上陸し、笹森等の一行は埠頭に在る港湾司令部の連絡所に出頭した。

当時のパラオ島は、戦略上の中継基地で、海と空から、移動、転戦の部隊が次々に往来し、軍隊一色で、殷賑（いんしん）を極める趣があった。

幹線的な道路に沿って、立派な構えの、一見してそれと判る遊郭が何軒かあった。外から見える玄関に、将校用の陸海軍の長靴が、きちんと揃へて並んで居た。

笹森等水戸聯隊からの三名は、「河三五六四部隊は、既に輸送船に乗り込んで居るから、このまま直ぐに乗船する様に――」と急がされ、パラオ上陸一時間そこそこで、連絡用の舟艇に乗せられた。

沖に碇泊して居た船は、下関からの船よりも二回りも大きな、三千屯（トン）級の貨物船で、船首船尾には、対空用の高角砲が据えられて居た。

部隊は三日前から乗船して居たとのことで、兵隊は下士官の指揮で、避難用の筏を船から降ろしたり、救命胴衣を着けて、海に飛び込む訓練を重ねて居た。

笹森は乗船して直ぐ、大隊長の渕上少佐に着任の申告をし、副官の白井中尉から、大隊

本部付きとして、弾薬班、行李班を統率する様に命ぜられた。

部隊は、ガダルカナル陥落に対する補強の為に、北支からニューギニアに転戦する途中で、パラオ島の奥に一ヶ月間駐屯し、その間、南方作戦の猛特訓をして来たとのことであった。

北支での戦闘経験が豊富な将兵は、精鋭らしい逞しい面魂で、笹森には身の引き締まる雰囲気であった。

兵員、装備を満載した船団は、笹森が乗船した翌日、パラオを発進し、大きな蛇行もせずに南下して居たが、その日は丁度、赤道直下に在り、昨日から暴風雨に見舞はれて居た。

笹森は早く部下に馴染む様に、常に船艙の二段寝台の上段に潜って居た。

激浪に振り廻されて、船体は右に左に、そして上下に激しく揺れて、木材を打ち付けただけの寝台は、ぎしぎしと音を立てて居た。既に何名もの兵隊が、船酔ひでバケツを抱えて嘔吐して居た。

甲板からラッパが聞こえ、週番上等兵が足元も危ふく梯子を昇って、命令受領に駆けて行った。

「全員、軍装して甲板に整列。十五分後に、皇居遥拝(ようはい)――」と週番上等兵が伝達した。

笹森は環境の変化に追はれ、暦の経過を忘れて居たが、今日は四月二十九日で、天長節だったのだ、と気が付いた。

甲板に出ると、午前中にも拘わらず、薄暗い雲が幾重にも垂れ込めて、雨と波濤が容赦なく全身を打った。

何気なく腕の磁石を見ると、一路南進して居る筈の船団が、何故か北に向かって居るのだった。

副官の白井中尉に理由を訊くと、船団の上陸予定地ウエワクが、二日前から猛烈な爆撃を受けて居るので、状況を視る為に、北上して入港を遅らせて居るとのことであった。

足元が不安定のまま、大隊長を中心に何とか踏ん張って、全員が甲板に整列し、各隊毎に、

「頭(かしら)ッ北ッ」

と遙かな日本に向かって、荒れる赤道の洋上から、皇居を遥拝した。

笹森は遥拝したその瞬間、図らずも意識上の視線の角度が、僅かにずれた。

今日が四月二十九日ならば、皇居の前の東京会館で、友人の柳川が令嬢Sと、華燭の祝典を挙げて居る筈であった。

柳川とは、大学予科に入学して識り合った仲で、真面目な勉強家の彼は、授業の無い時はいつも図書館で学術書を読んで居た。彼は経済学部に進級してから、任意団体の社会科学研究会に入った。

或る日、図書館の中を、何かに憑かれた様に歩いて居るのを見かけ、

「柳川、どうかしたのかい？」

と声をかけた。

「ああ、笹森か。あっちの椅子に行かないか」

と図書館内の休憩所に誘った。丁度、他には誰も居なかった。

「一昨日、紹介されて豊村助教授の家を訪ねたんだ……」

豊村助教授はマルクス経済学の研究者として、学内外で識られて居た。

「豊村さんの家で、暁方迄、討論してしまったんだが、徹底的に資本主義社会の矛盾や、今の軍部の危険な侵略主義を教へられてね、余りにも正統派経済学一辺倒だった自分に、がっかりしたんだ……。今からでも、社会主義経済学を学ばねばならないと……」

柳川はそれ迄の勉学が、無駄な廻り道だったと豊村助教授に窘められて、飜然と学ぶ方向を転回しようとして居るのだった。

それ以降、富裕な家庭の息子であった柳川は、既に絶版になって居たマルクス経済系統の書物を、左翼系書店に依頼し、偽名で買ひ漁って耽読した。

笹森も一度、柳川に強く勧められて、一緒に豊村助教授の家に行った。強度の近眼の、優しい瞳の助教授は、温かく初対面の笹森を迎へた。

併し、論説は実に鋭く、欧米の民主的政治体制や豊富な資源、ロシアの社会主義やナチスドイツ、日本軍部の独断専行等、広い学識を披瀝し、笹森にも合点が行き眼を開かれる

所論が多かった。

併し、当時の一般的世論からは、危険思想として指弾される主張が多かったので、笹森は豊村助教授の学識と学問的情熱に敬意を持ったが、二度と訪問はしなかった。

柳川は卒業後、基幹産業の統制会社に就職し、やがて徴兵検査を受けた。

検査の通知を受け取ると、彼は会社に病気欠勤の届を出し、信州の別荘に独りで篭った。そして毎日、付近の小川に行き、終日、下半身を水中で冷やし、自転車で山道を往復して、専ら肛門を傷めつけた。以前に痔を病んだ経験のある彼は、覿面（てきめん）に痔病を再発して、徴兵検査に臨んだのだった。

当時の陸軍では、肺結核と痔疾は最も避けるべき病気であったので、柳川は意図した通りに丙種不合格となって、入隊を免れた。

図らずも笹森は、暴風雨下の赤道の輸送船で、柳川の一連の行動を憶ひ浮かべたが、彼に対して非難も羨望も、侮恨の気持も起きなかった。

柳川の行為を、思想上の実践として一応は理解しても、笹森はそれに同調する思想は持って居なかった。

激浪の飛沫と豪雨を顔に浴び乍ら、死線に向かひつつある笹森の現況を、両親は、当時の青年の当然の責務として、無事を祈りつつ諦観（ていかん）して居る筈であった……。

笹森は、父母の為にも、現況に順応し克服せねばならぬと思って居た……。

彼は、家に伝はる日本刀を軍刀に仕立てて帯びて居たが、遙拝の為に抜いた刀身に、嵐が滝の様に流れて居た。

七　友人の戦死

暴風雨の赤道に退避して、五月一日に無事ウエワクに上陸することが出来た。

遠浅の海上には、爆撃で無惨に焼かれた貨物船が、船体の半分を沈没させて座礁し、傾いた残骸を生々しく晒して居た。

此処で何人かが戦死したのであらうと、初めて戦死の現場を踏んで、笹森は瞑目した。

慌しく、一ヶ月が過ぎた。

海岸近くまでジャングルが迫り、平地が乏しく、何時敵機の空襲があるか判らぬ状況なので、各隊は分散して、密林の中に駐屯地を定めて居た。

樹木は採り放題だったので、高床式に宿舎を建て、屋根には椰子の葉を重ねて葺いた。

一応、雨露を凌げる状態にはなったのだが、床は木の枝を敷き、其の上に椰子の葉を重ね、摺り切れた薄い毛布を敷いて横臥するので、枝が背中に当たって、算盤の上に寝て居る様な感じであった。

外見も実質も、パプアニューギニアの土民の住居と、少しも変わらぬ生活様式であった。

あるいは内部は、土民の方が先祖からの生存の工夫で、もっと快適な暮らしをして居るかもしれなかった。

笹森の部隊は、当時は前線に於ける後方予備隊で、兵站基地的なウエワクに、時々入港する貨物船の揚陸作業や、飛行場の構築整備作業が、連日の軍務であった。

その頃、次の貨物船で、聯隊長、大隊長の乗馬が運ばれてくると連絡が入った。

部隊本部から各中隊に、大工の心得のある兵隊を使役に出す様に通達した。

平地に建てて厩舎と判れば、直ぐ空襲を受けるので、密林の中の湿地でない場所を選び、手頃な樹を伐り出して厩舎を造った。選ばれた大工達が、豊富な材料を集めて久々に技術を振るったので、入口には玄関の様に蔓などをあしらって、兵舎よりも凝った小屋が出来上がった。渕上部隊長もわざわざ下検分をして満足して居た。

愛馬雄山号が到着する当日は、渕上少佐は朝から傍目にも落ち着かなかった。漸く、蹄の音がして到着すると、宿舎から飛び出して行って轡を執り、自分の顔を馬の頬に押し付けて喜んだ。馬も旧主との再会と判って、首を振っては顔を寄せた。

午後から少佐は、軍装を整えて二十粁離れた聯隊長の許へ、馬上豊かに出掛けて行った。

ジャングルを切り拓いた泥濘の道には、乗馬は最高の交通手段であった。少佐は久々の愛馬との再会で、人馬一体、幸せさうな騎乗であった。

夕刻、少佐が帰営し、当番兵の大野上等兵が馬を厩舎に繋ぐと、渕上少佐はドラム缶の

風呂にも入らずに、自分の宿舎に笹森を呼んだ。急用らしいので直ぐに行くと、少佐は厳粛な面持で待って居た。

「笹森見習士官、貴公は、K大の出身だったな？」

「はい、さうであります」

「では、河三五六六部隊の、渡辺とかいうK大を出た見習士官を、知っとるか？」

「渡辺なら、同級生でパラオ迄、同じ船で参りました――」

「さうか――、実は今日、聯隊本部で聞いたのだが、着任早々の其の見習士官が、戦死したさうだ――。前線の駐屯地に配備されて間もなく、奇襲を受けて、勇敢に闘って撃退はしたのだが、見習士官は壮烈な戦死を遂げたさうだ――」

「さうでありますか……」

笹森は、応答するのが精一杯で、がっくり肩が落ちるのを意識した。

「貴公の友人かもしれぬから、伝へてやらうと思ってな。用件はそれだけだ――」

「渡辺なら、勇敢に戦って、立派に戦死したと想ひます。お報せ下さって、有難う御座いました。」

渕上少佐の表情に、笹森への弔意と慰めが浮かんで居た。

着任して、一ヶ月程で戦死したとは、渡辺は死場所を索めて、遙々、ニューギニアへ来た様なものだった。

学生時代から、口数は少ないが実行力に富み、責任感の強かった渡辺を偲び、笹森は暗澹たる想ひで俤を追想した。

それにしても、別れる最後の船上で、寡黙な彼が、浮々と話した内田の妹との別れ――、そしていずれ伴侶として共に過ごし度いと描いた人生――、それが斯くも早く、総て消滅して了ほうとは――、渡辺の死を知った時の、内田の妹と内田の懐い――。

次々と想念が浮かんで、最後にパラオ埠頭で握手した時の掌の温かみ、堅く握った掌の反応、総てが昨日のことの様に脳裏に蘇って来た。

人間の一生が、斯くも儚く消滅して了ほうとは……。

笹森はその夜、輾転として、眠れなかった。

八　毒草

その翌朝、当番兵の大野上等兵が

「部隊長殿、雄山号が死んでおります――」

といふ叫び声に、渕上少佐を始め別舎の白井中尉、軍医、笹森等は一斉に飛び起きた。被服を着けるのもそこそこに厩舎に馳け着けると、昨日は旧主の騎乗で勇み立って居た軍馬が、泡を吹き、眼を剥いて死んで居た。相当に苦しんだ様子であった。

少佐は踝(かが)んで、愛馬の心臓に手を当てたが、既に如何ともする術は無かった。

雄山号は北支の戦場を、渕上少佐と共に闊歩(かっぽ)し、少佐の武勲を支へて来た軍馬であった。遙々、北支からパラオを経て、ニューギニア迄追及して、漸く再会し得た翌日、一日だけの騎乗を果たして死んでしまった。

気丈な渕上少佐も、愛馬の頬に手を当てたまま、瞑目して傍を離れなかった。

野戦通信の急報で、聯隊本部から獣医が、自転車を飛ばして駈け着けた。死因は、毒草が飼葉に交じったか、或いは厩舎の柱を噛んで居るので、木材そのものに毒性が有ったのか、何れにしても、毒物による急死であることは疑ふ余地が無かった。

厩舎は焼かれ、その跡に雄山号は土葬された。大きな塚の様な墳墓であった。

未開のニューギニアには、如何なる魔物が潜んで居るのであらうか……。

大地は、想像も出来ぬ程に肥沃であった。海岸線に僅かな砂浜を連ねるのみで平地が無く、大地の総てを密林が被って居た。

ジャングルの中に一歩踏み込むと、一米(メートル)先は、巨木、雑草、蔓草が密生して、全く視界を奪はれるのだった。幹回りが五米位ある大木が、天を摩(ま)する様に櫛比(しっぴ)し、その樹の根元から三米位の雑草が繁茂し、更に大木には、蔓草が巻き着いて葉を上空から地面に垂らして居るのだった。

正に天地は、上下左右、幾重もの深緑の闇であった。

雨季に入った豪雨の深夜、突然、宿舎間近の川辺で、ザ、ザ、ザーといふ大きな摩擦音が響き、ダーンと破裂する様な大音が轟いた。

てっきり、樹上に引っ掛かって居た不発爆弾が落下して爆発したものと、全員が舎外に飛び出した。

併し、爆発の火は見えず、硝煙も臭はず、付近を調べると、対岸の三十米程の大木が、川の増水で根元を洗はれ、根を掬(すく)はれて倒れたのであった。

そして、樹に纏(まと)わり着いて居た蔓草を、巨大な力で引き千切り乍ら、倒壊する音が、大きな摩擦音を発したのであった。

倒木が宿舎を直撃して居たら、被爆同様に何人かの犠牲者を出して居たに相違なかった。
斧鉞(ふえつ)を拒むニューギニアの、魔性を伴ふ自然の脅威の、一端であった――。

九　遺骨

大陸の様に広大な、ニューギニア島ウエワク地域の河川からは、砂金が採れるのだった。戦争が始まる迄は、濠洲（ごうしゅう）やアメリカから採金業者が入り、掘り出した砂金を、他に運搬手段が無い為に、小型の輸送機で搬出して居たのだと云ふ。それで点々と、海岸線に小さな飛行場が出来て居た。

日本軍が上陸して以来、これ等の飛行場を航空基地として居たが、狭い滑走路が有るだけなので、空軍基地としては甚だ不十分で、歩兵部隊を主力とした作業隊が、連日、滑走路の拡張と、待機する機体を守る為の掩体（えんたい）造りに動員された。

ジャングル内の宿営地から、海岸線の飛行場まで、毎日往復十数粁（キロ）の道を灼熱（しゃくねつ）の太陽の下、黙々として作業隊は通った。行軍だけでも、食糧が充分でない身体には、相当な消耗が感じられた。そして作業は、小さな円匙での穴掘りや、畚（もっこ）による土運びの重労働であった。

空軍力の充実こそが、南方戦線の危機即全軍の頽勢を救う途と命ぜられ、作業兵は慣れぬ労苦に耐え、空軍の増強を期待して、頑張って居た。

一方、ジャングル地帯のマラリア蚊の猛威は、言語に絶するものがあった。蚊に刺されて一週間乃至は十日間が、マラリアの潜伏期間なので、上陸後半ヶ月が経った頃から、各隊にマラリア患者が続発した。

斯かる状況は当然、開戦前から判って居たので、マラリア対策として予防薬のキニーネは各自に充分支給されて居て、服薬の励行を厳命されて居た。

併し、マラリア蚊に刺されないことは、絶対に不可能であった。窓も扉もない宿舎は、蚊の跳梁(ちょうりょう)を自由にし、一応、夜間には蚊帳(かや)も張ったが、長い輸送中の梱包で布が傷み、更にニューギニア特有の湿気で、直ぐに破れて了ふのだった。

マラリア蚊の体長は、日本の藪蚊よりずっと小さく、蚊帳の穴を通過するのは全く容易であった。部隊でも、防蚊対策として、敵機の心配の無くなる夕刻から、大焚火をして燻煙し、その煙を宿舎に、天幕で扇ぎ入れるなどの努力をした。

食糧も、制海制空権の減少に比例して、日を追ふ毎に悪くなった。現地収得を主とする様にとの命令が来て居たが、食用にできるものは、広大肥沃なニューギニアの大地に、全く少なかった。栄養の失調と、マラリアの発生が並行した。

マラリア患者は、一回目はそれ程でもなく治ったが、罹患を重ねる毎に重症になった。発熱の前に極端な悪寒がして、歯の根が合わぬ程、全身が震へた。それが一時間程度で納まると、急に四十度以上の高熱を発した。

発熱の期間が三日続くものを三日熱、四日続くものを四日熱と言い、一週間も十日間も高熱状態が続く悪性のマラリアを熱帯熱と呼んで居た。

斯かる病状に対して、現地に於てはキニーネと更に強いアクリナミンの投薬以外には、何の対症療法も無く、唯、戦友が川から水を汲んで来て、手拭いを頭に載せてやるぐらいのことしか出来なかった。水の手拭いは、直ぐに湯の湿布になってしまうのだった。

四十度の高熱が幾日も続き、強いアクリナミンを服用して居ると、病人は一時的に錯乱して、突然、起き上がって銃を執り、

「突撃ッ――」と叫びつつ舎外に馳け出したり、毛布を抱えて「おッ母さんよう――」と泣き出したりする者が居た。

マラリアで病死した者、飛行場や揚陸作業中に戦死した者は、航空隊から廃油を貰って来て荼毘に付した。

遺骨は、無事に入港した貨物船の、悲しい帰り荷として、丁重に船内に奉安され、内地に還って行った。

軍隊には各種の職業の者が居て、渕上部隊には良い指物師の上等兵が居た。

日が経つにつれて、遺骨の箱を作る仕事が、広田上等兵の専業になってしまった。職人らしく私物の中に、小さな鋸や鉋を持って来て居て、

「嬉しくない仕事だなあ――」

と云ひ乍らも、作ること自体は苦にならない様子であった。

必要に応じて彼は、足を踏み入れるのも容易でない密林に分け入って、箱に適する木を探して材料にして居たが、鬱蒼とした大木の中から用材を伐って来るのは並大抵ではなかった。彼は丹念に材料を切断し、釘がないので嵌め込み式の立派な箱を作った。そんな努力を見て、

「広田上等兵殿、樹を伐って来たり削ったり大変だから、余った材料で、箱を余分に作って置いたらどうですか?」

と兵隊が言ふと、

「馬鹿野郎、縁起でもないことを云ふな。」

と怒鳴りつけ、余った材木は惜し気もなく、燃して了ふのだった。

其の日、広田は三個の箱を作る為に、精を出して居た。そして、漸く出来上がった箱を眺めて、

「ニューギニアの木は独活(うど)の大木で緊りが無く、こんな柾の通った材料は初めてだ――」

と呟き、初めて残材を捨てないで、更に一個を余分に、丹念に作り上げた。

「あれ、上等兵殿、三個で宜かったのではないですか?」

「そうなんだが、此の木が気に入ってなあ、捨てる気がしないで、遂、余分に作ってしまったんだ――」

広田は満足そうに、最後の箱に見入って居た。

その翌々日、夜陰に入港した一隻の揚陸作戦中、大した空襲ではなかったが、貨物の集積場所を狙った機銃の掃射に当たって、逃げ遅れた広田上等兵は、戦死した。

彼は、自分の為に作った結果となった、気に入りの箱に姿を変へて、父母の許に還って行った……。

十部下

笹森にとって、二等兵の初年兵生活三ヶ月は、一般兵と同様に兵営生活の内務班で、理屈の通らぬ連帯責任により、ビンタ（顔面への平手打ち）の私刑を古参兵から屡々（しばしば）受けたし、予備士官学校の短期教育では、朝から晩まで徹底的な軍事訓練で、心身共に休まる暇が無い生活であった。

そして、即席将校の見習士官は、羨望、反感、不信で苦労すると聞いて居たが、倖ひにも戦場第一歩のウエワクの駐屯生活は、大隊乙副官の立場でもあり、部隊長の渕上少佐が士官学校出の磊落（らいらく）な人柄で、之を支へる副官の白井中尉、軍医の広瀬、橋本両中尉、渡辺見習士官等、夫々が大学教育を受けて来た連中なので、笹森にとって、戦況の悪化による物資の欠乏と、先行きの不安以外には、別に精神的苦痛は何も無かった。

軈（やが）て、任期が来て少尉に任官した。

笹森は指揮下にある部下にも、生ある限りは少しでも心休まる生活をさせたいと念じて居た。

日が経つにつれ、統率下の弾薬班、行李班で、班長の両曹長の性格が反映し、微妙な差

があることが判って来た。

防蚊の為の夕刻の焚き火にしても、一方は決められた時間に定刻に開始し、三十分経つと水を掛けて止めてしまう。而も五名ずつの当番制で、黙々として役目を果たして居た。

一方は、「燻煙の時間だぞ――」と古参兵が言ふと、手の空いて居る兵隊が飛び出して来て、お互ひに喋りながら焚き火をした。

行李班長の前賀曹長は、ずぼら乍ら、明るい性格の召集兵で、何か失敗をして指摘されると、頭を掻いて非を認めて淡々として居た。

弾薬班長の松沢曹長は、少しの失敗も犯さぬことを自分に課し、相手をも許さない性格であった。それは二人の目標が、松沢は歳下だが古参の曹長であり、やがて准尉になり少尉候補者に合格して、人生を陸軍軍人として送る希望であり、前賀は無事に勤務を終えて帰郷する日を夢見て居る為であった。

松沢は晝間（ひるま）の揚陸作業や飛行場構築作業（何れも敵弾下の作業なので、正式には作戦行動と呼ばれて居た）が早く終わった日は、必ず間稽古として銃剣術を行った。

松沢自身も当然防具を着けて先に立ったが、作業中の労働量が一般の兵隊とは瞭らかに違ったし、汗を拭く間もなく防具を着ける兵隊の疲労が、過重に見えて心配になった。笹森も竹刀だけを持って間稽古に立ち会った。

寧ろそれは、松沢の自己満足と部隊長への得点稼ぎと想われもした。

作業の疲労か、マラリアの気配でも有るのではないかと思われる兵隊が、足元をふらつかせて木銃を構えると「まだ、まだ、そんなだらしないことでどうする。」と松沢は手加減もせずに突き伏せた。

そんな状態が気になって、稽古を終わった或る日、笹森は

「松沢曹長、兵隊を充分に教育するのは結構だが、彼等は大部疲れて居る様だし、マラリアを誘発しなければ可いがと心配だが……」

と言うと、途端に松沢は蒼白い顔を硬張らせて、

「戦場で、これくらひの事に耐えられぬ様でどうするんですか？　其の為の体力、気力を着けさせて居るんです。班の指導は、自分に任せて置いて下さい。」

と反撥的な返事をした。

「さうか――。今言ったのは、俺の松沢曹長への提案で、命令ではないのだから、暫く様子を見ることにしやう――」

笹森は想像して居た様な松沢の一面を見たが、釈然としないまま其の日は別れた。

何日かの後、松沢が例の如くに間稽古を課した。先日の一件があったので、立ち合はないのは不自然と、用務を後に廻して、笹森はその場へ行った。

稽古の休憩の折に、松沢が寄って来て、

「少尉殿も予備士官学校で、軍刀術をやられたんでせうから、自分とお手合わせを願へま

せんか？」

と言った。冷然としたその表情を見て、笹森も心に期した。彼は大学時代に剣道部に居て四段を貫ひ、士官学校では校内対抗試合に中隊の選士に選ばれた腕前であった。

笹森も防具を着けて試合を始めると、松沢は殺気をも感じる目を据えて迫って来た。長年の修練で、自信を持って居た。

笹森は木銃の先端を、竹刀で三回ほど左右に拂った。咽喉を狙って居るのが判ったので、挑ね上げて降ろす所を飛び込んで面を打った。美事に決まったので、観戦していた兵隊が手を拍った。鼻白んだ松沢は、

「少尉殿、面を打っても実践では、敵は鉄帽を被って居るから効果はありませんよ。」と理屈を言った。

「さうか、道具外れでは気の毒だから面を打ったのだが、それなら今度は、実践的に行くぞ――」

七、八合打ち合って、笹森は咽喉に諸手突きを入れた。面の下から直撃したので、松沢はたたらを踏んで、走り根に踵を取られて尻餅をついた。

それ以来松沢は、笹森を避ける様になって了った。

意志の疎通、人事の管理、そして融和と団結、その基本となる各人の経歴と体験の差――、生死の境に在る生活の中で、これらの課題を如何に円満に解決して行くべきか、

笹森は人識れず重い心で、模索した……。

十一　童貞

「イケ、ザワ。イケ、ザワ」とパブア族の土民が、今日も白井副官の当番兵の池沢一等兵を呼んだ。

「唉呀（アイヤ）、また池沢と呼び捨てにしやがる」

池沢は宿舎の台所から、舌打ちした。

池沢は剽軽（ひょうきん）で機転の利く、北支転戦の三年兵であった。宿舎の場所を決めて間も無く、将校宿舎の裏手の密林に岨道があり、朝夕、土民の男女が七、八人ずつ往来するのを知った。

池沢は或る日、彼らを自分の宿舎に連れて来た。土民は既に、日本兵は危害を加へないことを識っていたので、興味深さうに蹤（つ）いて来た。

「你（ニイ）、酋長（チウチャーン）？　機（ニイ）、酋長（チウチャーン）？」

池沢は北支に居る間に、中国語の単語を覚えて居たので、土民に対しても中国語を使った。

一番年長の、頭に羽を飾って居る土民が、訊かれる意味が大体判ったらしく、ニヤニヤ笑ひ乍ら肯いた。

「我（ウオ）、池沢。我（ウオ）、池沢。」

彼は自分を指して教へた。

「イケ、ザワ。イケ、ザワ……」

酋長は理解して繰り返した。併し、これが池沢一等兵の誤算であった。それ以来土民は、池沢に親しみを寄せたのだが、「イケ、ザワ。イケ、ザワ」と呼んだ。仲間が面白がって、「池沢一等兵、上官殿がお呼びだぞ」とからかった。その後池沢は、何度も「池沢さん、池沢さん」と教へ直したが、土民には訂正の意味が通じなかった。

池沢は土民から、時々、薯（いも）や野菜を貰って食事に添えたが、いつも大した量ではなかった。それが或る日から、彼等は毎日、自分から何かを置いて行く様になった。

半月程前に、土民一行の往来に、何故か酋長が四日続けて姿を見せなかった。池沢は手真似、足真似で様子を訊き、酋長はマラリアの発熱で寝て居ることが判った。彼は早速キニーネを取り出し、先ず自分が飲んで見せて、一粒を酋長に飲ませるように伝えた。

二日後、平素は夕方しか寄らない一行が、朝の出掛けに顔を出した。酋長はぺたぺたと自分の額を叩き、精一杯の笑顔を見せた。キニーネが覿面（てきめん）に効いて熱が下がり、斯様に元気になったと喜んで居るのだった。

それ以降、感謝と親しみを増した彼等の、貴重な配給が増したのだった。

池沢は調子に乗って、或る日、蹤いて行こうとしたら、密林の中で池沢を撒（ま）いてしまっ

て、その棲処を知らせなかった。

「メリー、メリー、ちょっとおいで――」と池沢が呼んだが、土民の娘は振り向いただけで、足早に去って行った。

「池沢、あの娘はメリーと云ふ名なのか？」

「いえ、自分が付けてやった名前であります」

笹森は軍務が忙しく、土民達に逢ふことが稀だったが、彼等の一行は、酋長とその妻と娘、屈強な男性四、五人が一団となって、保有する畑の仕事や、海岸での漁に出掛けるのだと識った。

池沢に教へ込まれたらしく、笹森を見ると一行は、右手を額に当てた。挙手の礼のつもりらしいので、笹森も笑顔で答礼した。

「唉呀（アイヤ）――、酋長が少尉殿に敬礼する時に、何時もメリーが背後に居て、少尉殿を見つめて居ますよ。あの娘、少尉殿に惚れたらしいな……」

言はれて笹森がメリーを見ると、必ず父親の傍に立って、じっと笹森を見つめて居るのだった。

笹森は、娘が一五、六才位で、欧米の血を幾らか享けて居るのか、土民には珍しく鼻筋が通り、澄んだ瞳で締まった唇をして居るのを識った。

さう想って観ると、腰蓑の下に伸びる豊かな脚や、布で被はれて居る胸の膨らみが、眩（まぶ）

しかった。

「少尉殿、そのうち、メリーと

　私のスーちゃん（恋人）酋長の娘

　色は黒いがニューギニアじゃ美人

なんてことに成るんじゃありませんか。」

池沢が流行歌を真似して囃した。

「馬鹿なことを言ふな。日本軍は軍規厳正だから、土民の娘をスーちゃんになどしない。」

さうは言ひ乍らも、酋長の背後で、無表情のまま、じっと見つめる娘の瞳に一途なものが感じられて、メリーが来ると笹森も其の姿に目を向けた。

「笹森少尉、メリーちゃんに惚れられたんだってな――」

夕食後、本部の将校が談笑して居る所へ、渕上大隊長が来て、からかった。

「とんでもありません。池沢の奴が、勝手に言って居るだけであります。」

「いや、あの娘は、色が黒いのを別にすれば、なかなか佳い娘だぞ。笹森少尉は未だ童貞ださうだから、出来れば取りもってやり度いところだが、此処ではそれは出来ぬからなあ……」

「冗談じゃありません。此の状況で土民の娘と関係を持ったりしたら、部隊全体から指弾されます。」

「うん、将兵全員が、仏様の様な生活をして居るのだから、道心堅固で居るより仕方がないな。」

笹森の学生時代には公娼制度があったので遊里に行く者と行かぬ者の二極があった。仲間の内でも、社会が認めて居る制度だから、必要に応じて利用して差し支へないと言ふ少数派と、不浄な場所であり、学生の身で不行跡と言ふ心情で近寄らぬ多数派とがあった。笹森は家庭教育で、公娼など学生の行く場所とは隔絶した世界という観念を持って居た。まして、素人の女性と深い関係に陥るなど、機会的にも環境的にも絶無であった。

併し笹森も、ニューギニアの明日をも知れぬ境遇に身を投じてからは、女性体験のないまま、男性としての悦びを知らずに人生を終わるのは、人間としての摂理にも反する恨事であると思う様になって居た。

曽て、与謝野晶子の

やは肌の熱き血潮にふれもみで
さびしからずや道を説く君

の歌を、女性の身で能くも詠んだものだと他人事として思ったものだったが、明日の運命を計り難い青年の心情を、此の閨秀歌人は何と詠嘆するのだらうなどと思ふのだった。

折にふれて、メリーが座興の話題に上がったのは、土民とは言へ、若々しい清純な姿態が、誰の目にも好ましい存在に映ったからであった。

或る朝、酋長の一行が薯や野菜を一杯に抱えて訪ねて来た。酋長は池沢に、何やら長々と喋って居たが、池沢には全然意味が通じなかった。

メリーが初めて、笹森少尉に寄って来て、何も言わずにパパイアを一杯詰めた篭を差し出した。ウエワクに来て初めて見るパパイアであった。

恐らく土民が、部落の近くに大切に植えて居るものに相違なかった。そしてそれは明らかにメリーから笹森への初めてのプレゼントであった。

慌てて篭を受け取り「サンキュー……」と言って笹森は手を差し伸べた。メリーはお礼の言葉も握手の意味も判らなかったが、真直ぐに手を突き出した。笹森が握手した掌に力を入れると、メリーも力を込めて握り返した。

酋長等は微笑して眺めて居たが、メリーは終始、笹森を凝視したまま、硬い真剣な表情を変へなかった。

軈(やが)て彼等は、額に手を当てて敬礼し、同じ径を帰って行った。密林に岨道(そどう)が隠れる時、メリーが一度振り返った。

其の日以降、酋長等は全然姿を見せなくなった。初めのうちは、部落に何か行事でもあるのだろうと噂して居たが、恐らく彼等は棲処(すみか)を移したに相違ないと推測された。

土民は、先祖から伝はる畑で、生存可能な人数のみで一族を構成し、それ以上子供が生まれると間引いてしまい、更に畑が生活の役に立たなくなると、一族を挙げて新天地に

移るのだと言う。

メリーの一族も、日本軍の前線の敗北を伝へられ、自分らの部落がいづれ戦場になることを予想して、逸速く次の生活の場を拓いて行ったに相違なかった。

部隊本部の将校等は、忽忙窮迫の生活の中で、いつしか土民の噂をしなくなった。

笹森は、眠れぬ夜の様々な想念の中に、時々メリーの姿が現れて、独り名状出来ぬ想ひに捕はれることがあった——。

十二　物量の差

飛行場の構築、整備作業が主となって、月に一回位しか揚陸作戦は無くなった。既に制空権を失ひ、輸送船の到来が困難になって居た。通達では、何日後に、何隻が入港の予定と報らされるが、多くは到着前に撃沈され、ウエワクに姿を現すことは稀になって居た。そんな情勢の下、明早暁、二隻入港との通達で、作業部隊は前日から、勇躍して待機した。

薄明の沖に、一五〇〇屯級の、待ち焦がれた貨物船が無事の姿を現した。船舶部隊が忙しく船と陸との間を行き来し、それに応じて作業部隊も、負けずに荷揚げに奮闘した。

朝鮮人の徴用者や、インド兵の捕虜も平常より多く動員されて居た。インド兵は相変らず、梱包貨物を頭に載せ、裸足でのんびりと作業するので、彼等の受持区域だけは、遅々として荷役が進まなかった。

何故か今日は空襲が無いと話しているうちに、豆粒程の編隊が望見された。直ぐに友軍戦闘機が、次々と邀撃に飛び立って行った。いつもより機数が多く、船団が無事に着いたのは今回の護衛体制が強化されて居た為らしかった。

敵の戦闘機が、爆撃機の周囲を浮塵子のように取り巻いて護衛するのだが、その日は戦

闘機同士の華々しい戦ひの間隙に、爆撃機が孤立する状況があった。友軍戦闘機の数が、敵の予想を上回り、珍しく有利な戦闘をして居る模様であった。

一瞬の間隙を衝いて、わが戦闘機が敢然と至近距離から爆撃機に銃撃を浴びせた。やったと息を呑んだ瞬間、B17爆撃機は、忽ち火の玉になって墜落して行った。

それ迄にも、何度か勇敢な空中戦を見て来たが、多勢に無勢で友軍機の苦戦しか見ることが出来なかった作業部隊は、初めて目の前で敵機の墜落を確認出来て、弾ける様に手を拍ち、歓声を挙げた。

空中で戦果を挙げたので、揚陸作戦も捗って、貨物船は帰り荷として、各隊に溜まって居た遺骨を奉安すると、早々に帰航して行った。

作業が終わりに近付く頃、沖から幾つかの敵機からの梱包が打寄せられて来た。兵隊が浜に引き上げると、中には大小の缶詰が入って居り、撃墜した敵機からの浮遊物であることが直ぐに判った。

兵隊は上官の許可を得て、戦利品を次々に開いた。案の定、ビスケットやチョコレート等が現れ、更にべっとりとした固形の油が入って居た。

「何だ、保革油じゃないか――」と匂ひを嗅いで兵隊が捨てたが、「待てよ――」と下士官が缶の印刷に見入り「ビ、ビ――」と首を傾げて居たが、「ああ、ビタミンと書いてあるんだ。少尉殿、これは喰へるんじゃありませんか?」と持って来た。見れば、マーガリ

ンの缶詰で、内容の栄養価が印刷されて居るのだった。

捕獲物を開いて、笹森は驚いた。それ等の中には、落下傘で降下退却する際に、救援の来る間の生活必需品が用意してあり、薬や繃帯も入って居た。そして笹森が最も驚いたのは、マッチであった。

現地の兵隊は、特に将校の當番兵は、毎日食事を作らねばならず、火を起こす為のマッチが、ニューギニアの湿気で容易に着火せず、何本も無駄にするのが常であった。

彼等は対策としてマッチをパラピン紙で包み、更に手拭いでくるんで、而も腹に巻いて湿気から守って居た。

然るに、連合軍のマッチは、マッチの形をした蝋燭であった。軸の部分が木ではなく、蝋の棒になって居るので、直ぐに着火して完全に燃え盡きる迄、消えることが無いのだった。

マッチ一本にして然り……。笹森は彼等の物量の差に、唖然とした。

太陽が西に傾き、揚陸した貨物の分散も終わろうとし、打ち寄せる戦利品が皆引き揚げられても、それ等を用ひるべき撃墜された兵士は見つからなかった。

爆弾を満載し、攻撃を仕掛ける直前に被弾した爆撃機は、瞬時に炸裂して、機内の将兵は落下傘による脱出の暇が無く、機中で戦死したに相違なかった。

日本軍の戦闘機が、撃墜した海面を巡回して、敵兵の姿を索めて居たが、人影は見えな

かった。

勝ち残った友軍機が、地上の友軍に何の合図もなく、淡々として引き上げて行った。

戦死とは、敵味方の差別なく、瞬時に、いとも簡単に、此の世を去ることであった……。

十三　椰子（やし）と鰐（わに）

糧秣はいよいよ欠乏して行った。

野生の芋や、大切に蓄へて来た乾燥野菜だけを少量ずつ食ひ繋ぐ日々なので、指を手首に廻すと、痩せ具合が判然とした。

師団命令で、少しでも現地自活の手段にする様にと、内地の野菜の種を配給され、乏しい平地を耕した時があった。

地味が肥沃なので、豪雨を畦の大きさで躾（かわ）すのに、成功した隊では、一週間ほどで茄子が五〇糎（センチ）程の長さに成長した。

併し、内地の美味を満喫したのも一両日で直ぐ敵機に発見され、茄子は機銃の掃射を受け、畑は五〇瓩（キロ）爆弾で吹き飛ばされた。

斯かる状況下で、唯一の救ひは椰子の実であった。

海岸線一帯に、第一次世界大戦以前に、ドイツ人が植林したという椰子林が、整然とした間隔を保って、亭々（ていてい）と十五米位の高さに生長して居た。そして梢（こずえ）の辺りに、蹴球ボール程の果実を、たわわに実らせて居た。

椰子の実は、芯に刃物が簡単に突き刺さる未熟の頃は、果汁が甘酸っぱくサイダーの味

で、純白の果肉は柔らかく、烏賊の刺身の様であった。

完熟した実は、容易に刃が立たず、叩き割らねばならなかったが、硬い果肉は、焼くと南京豆の味がした。そのころの果汁は、適当に発酵して居て、ブランデーの風味があった。

地上に、自然に根付いて芽を出す頃の実は、果肉が林檎か梨の味がした。

斯く繁殖力旺盛な植物であったから、果汁も果肉も、充実した栄養分を持って居て、体力の補強に非常に役に立った。

過去にドイツ人が、工業用原料として栽培した椰子なので、「これも日独協定の賜物だ」などと言って珍重した。

併し、椰子の実を採るにつけても、犠牲は常に付きまとって居た。

椰子の樹が現在の大きさに生長するには、二、三十年を要するので、伐採しない様にとの軍司令部の通達があり、伐り倒す様な無謀はなく、初めは無造作に梢の高さまで採りに登った。登るには年輪の節目が幹に層をなして居るので、それを足場に兵隊は、猿の様に簡単に登った。

ところが、梢の果実の周辺には、三糎もある赤蟻が群棲して居て、一斉に外敵に噛みついて来た。実に獰猛な蟻で、食ひついたら、摘んで離しても、首だけ残して離れなかった。

噛まれた激痛で、思わず幹から手を離し、硬い根元に墜ちて死んだ犠牲者も出た。

以降は、革帯で身体を幹に絡め、手袋をして登ったので、蟻との樹上戦に敗れることは

なくなったが、飛来した敵機に狙はれて、椰子の樹上で戦死した兵隊も出た。

河での、犠牲者も出た。

衣服を河の中で洗濯して居た兵隊が、突然、ギャッと叫んだので、仲間が振り返ると、其の場に居る筈の仲間が見えず、暫くして水中から血汐が湧き上がって来た。

鰐が、洗濯して居た兵隊を襲い、水中に銜(くわ)え込んだのだった。

鰐は生来の造型で、倒木に似た体型をして居るので、眼だけを出して川の流れに従ひ、倒木と共に浮いて来て、一瞬にして水中から獲物を襲ふのだった。

川を生活の一つの方便として居る土民は、鰐を天敵として恐れて居た。

戦場生活は、常に死との隣り合わせの暮らしであった。

十四　満期帰還

北支からニューギニアに転戦する過程で、満期除隊する兵隊下士官はあったが、将校は殆ど全員が移動して来たので、見習士官の補充もあり、大隊から三人の将校が、内地に帰還することになった。

大橋中尉は、士官学校を優秀な成績で卒業した青年将校で、聯隊の軍旗の旗手を勤めた後、中隊長をして居たが、北支の激務で肺を冒され完治しないでニューギニアに渡った為、マラリアの進行が早く、相当な重症で帰還要員に入れられた。

松井主計少尉は、主計科の志願下士官からの昇進者で、北支で物資の調達に腕を振るひ、栄えある内地部隊への転属であった。

森田准尉は、二等兵から営々として累進し少尉候補者を志願して居た。本来なら厳格な試験が行はれるのだが、試験など実施出来る状況でない為、部隊長の推薦と戦歴によって合格が決定された。内地に着けば、晴れて少尉に任官し、念願であった軍人生活に入るのだった。

渕上部隊では、密林の中に全将兵が集合して、歓送式を行った。

渕上少佐が、三人夫々（それぞれ）の具体的事例を加へて武勲を讃え、今後一層の活躍を希望して祝

辞を述べた。

三名は別れの挨拶をしたが、大橋中尉は発熱の為元気が無く、本職の軍人として任務を全ふせぬことに遺憾の意を述べた。真面目な人柄なので、窮迫の戦地から先に撤退する慚愧が先に立って、嬉しさよりも申し訳ない風情の挨拶であった。

松井主計少尉は、元来多弁な性格なので、北支での失敗談を語ったり、今後のニューギニア戦線の多難さを予測したり、残留する者にとっては、暗い予測など耳に触る部分もあった。

彼は長い挨拶が終ると、下士官兵隊の列に分け入り、肩を叩いたり握手をしたり、如何にも嬉しさうな様子であった。

森田准尉は、元来が口下手で、緊張して真赤（まっか）になり、戦友一同に訥々（とつとつ）とお礼を述べ、残る将兵の武運長久を願ふ言葉が精一杯であったが、嬉しさを隠し切れぬ誠実な挨拶であった。

送る側の将兵にとっても、ウエワクから凱旋者が出ることは、被爆、マラリア、窮乏の中の、明るく今後に結び付けたい慶事であった。

併し、松井主計少尉が言ふ様に、先々は、暗い予想しか出来ぬので、果たして、二次三次と凱旋者が選ばれるのか、不安と羨望の気持が浮かぶのを押さへられなかった。

その翌日、一隻だけ忍ぶ様に入港した貨物船で、帰還者全員は無事にウエワクを後にし

た。

その十日後、予想もしなかった悲報が、飛び込んで来た……。

聯隊本部からの急報に據れば、一行の乗った貨物船が、パラオ近くの洋上で、薄暮に潜水艦の攻撃を受け、船は二発の魚雷で撃沈し、乗員全員が戦死した……とのことだった。

功成り名遂げた形での内地帰還が、一轉(いってん)して無明の世界に沈んでしまふとは……。

渕上少佐以下の部隊の将兵は暗然として、声も無く哀悼の心で消沈した。

その夜は、沛然(はいぜん)たる豪雨と、天を裂く雷鳴とが、人の世の無情に和して居た。

十五　男色

大橋中尉の後任として、聯隊本部から成島中尉が着任した。

大隊本部へ渕上少佐に申告に来て、白井副官以下軍医、主計とも挨拶を交わした。笹森少尉を見ると、

「少尉は儂の中隊付きださうだな。何かの縁だ、近いうちに知らせるから、ゆっくり一晩話し合ほうや」と云った。

癇高い声の、四十歳過ぎの召集将校で、笹森には異質なものが感じられた。

そして十日後、中隊の当番兵が、用務が無ければ笹森少尉に、夕刻から来隊する様にと、伝えて来た。その旨を渕上少佐に伝へると、

「何の用だ？　まあ、行ってやれ。」

と成島中尉への評価を現す様な、不機嫌な調子で言った。

白井副官が、成島中尉には男色の噂があると呟いた。

成島中隊は小川を一つ越えた山峡の密林に宿営して居た。中隊長は将兵の宿舎から少し離れた川べりに、新たに小屋を建てて宿舎として居た。

笹森を見ると「おう、良く来たな――」と上機嫌であった。そして気忙しく、当番兵に夕食を持って来させた。笹森は先任将校も一緒の会食と想って居たので、

「少尉殿二人は？」と敢えて訊くと、

「あの連中とは、先日話し合ったから宜いのだ。」と言って、せかせかと食事を始めた。

「笹森少尉は東京の出身だってな？」

「はい、軍隊以外に東京を離れて生活したことはありません。」

「東京育ちは佳いな、何処となく垢抜けがして居るからな。家族は？」

「両親が健在で居ります」

「一人息子ださうだな。可愛がって育てられたんだろう。大切な倅だ――」

成島中尉は次々と問い掛けて一人で喋って居た。更に続けて、両親の出身地や年齢、職業、親族に関してまで訊き始めるので、笹森は話題を変へさせ様と、頃合いを見て、

「自分はご承知の様に、戦場の体験がありませんので、中隊長殿のご経験でも聞かせて頂けませんか？」と促した。

「儂はなあ、貴公と違って田舎者で、農業学校を卒業して、町で家業の旅館と料理屋をやって居たんだ。今度が二度目の召集で、既に四年目になるんだ……」

中尉の口調が急にしんみりとして、

「こう云ふご時世だ、女房一人では手に余ることばかりだらうと思へて、家族や店のこと

が心配だよ……」

戦歴を訊いたのに、初めて呼び寄せた部下の将校に自分の境遇を憂はしく話すとは、成島中尉の意図は何なのだろうと訝った。中年の成島が、銃後の家族を懐ふ気持は理解できても、笹森として何と云ふべきか窮して居ると、

「それにしても、お互いにえらい戦場に廻されたもんだ……」

成島中尉は慨然として居たが、急に改まって、

「笹森少尉、今、敵が攻撃して来たら、どう戦ふ覚悟だ？」

「自分は経験が有りませんから、上からの所命必勤で……」

中隊長の真意が判然としないので、曖昧に答へた。

「敵が本格的にウエワクを攻略する気になれば、当然、先づ艦砲射撃を浴びせて来るだろう。併し、此処の我が軍にはそれを撃退する兵力はないし、艦砲射撃で制圧した後に火炎放射器などを使ひ乍ら上陸して来たら、向かって行ったとしても勝ち負けは初めから判って居る。倖ひにウエワクにはアレキサンダー山脈が背後に迫って居て、その中はジャングルだ。其処迄、退避してゲリラ戦でもやる以外に、我々の戦法は無いと考えられる——。

儂も大日本帝国の軍人だから、上から命令されれば、突撃でも何でもする覚悟だが、〝死んで花実が咲くものか〟じゃないか。御国の為にご奉公できるのも〟命有っての物種〟だ。

儂は此の中隊を預かって、どうすれば戦死をせずに国の為に戦へるか、そればかりを考

へて居るんだ……」

意外な述懐を聴いて、笹森は改めて成島の顔を見直した。

「何とか戦争に勝って、還り度いものだ。儂は絶対に死なぬ。そして絶対に兵隊を死なせない。誰も彼も、大切な国民ばかりじゃないか……」

成島中尉は、更に本心を付け加へて述べたのだが、思想的、宗教的な信念ではなく、彼本来の戦争に対する信念の様であった。

大隊本部の白井中尉以下の将校達も、現在の戦況が頗る絶望的で、十日先、半月後の戦線の危機を、肌に浸みて感じて居る筈であったが、敢えて口にすることを、高等教育を受けた幹部の見識として、口に出さないのだった。

成島中尉は何の躊躇も無く、平素の本心を明かしたので、笹森は語られたことへの是非は別として、彼の人間性に信頼を感じた。そして其の真情に対して、

「中隊長殿、自分は今、大隊本部付きですが、中隊に戻って戦ふ時は、与へられる任務に対して、最善を盡す覚悟で居ります」と笹森は本心からさう言った。

「其の時は、お互ひに力を合わせて、頑張ろうや――」

成島中隊長が力を込めて笹森の手を握ったので、笹森も同様に握り返した。男同士の誓約の感があった。

暫く二人は黙々として居たが、

「戦場は寂しいなぁ……」

と言うと、成島は突然、笹森の手を取って引き寄せ、肩に手を廻した。笹森は成島の感情の変動に驚いて、

「どうしました隊長殿、自分は日本男子ですよ、大和撫子と間違はないで下さい」

と冗談めかして、強く振り払った。

「済まん、済まん」

成島は手を引っ込めて、吐息を吐いた。

成島中尉は、不安と迷ひと責任感で、現在の生活に戸惑って居るのだった。誰かと本心を通じ合って軍務を遂行したいと考へて、自分に真情を吐露したのだと笹森は理解した。そして、責任の重さや望郷の念が、やるせない心情に混濁して、階級を盾にしての下級者への男色の噂に繋がって居たのだろうと推量した。

六ヶ月後、河三五六四部隊は、決戦の為にウエワクから南方の最前線に投入された。敵は既に、何ヶ月も前から応戦の準備を整えて待ち受けて居た。

敗戦を重ねて居る友軍の危機を打開する為、先ず大隊単位の偵察的攻撃を仕掛けることになり、成島中隊は右翼からの攻撃を命ぜられた。

成島中尉は直ちに偵察隊を編成して敵状を探ったが、敵は密林の中に蜘蛛の巣の様に鉄

条網を張り巡らし、来襲すれば一斉に砲火を集中する態勢が整って居た。

〃×月×日×時に成島中隊は右翼A地区より攻撃を開始し、万難を排して敵のY地点を攻略すべし〃との命令が下されたが、成島中尉はA地点の真正面から攻撃すれば、飛んで火に入る夏の虫だと、更に右方面に迂回して攻撃の活路を索めた。

併し、右方面への転回は難行を極め、前進に時間がかかって、命令の時間に攻撃が開始出来ず、その分だけ、味方の左翼、中央部隊が火力を集中され、被害が増した。

此の作戦は失敗に終わり、非難が右翼攻撃を遅らせた成島中隊に浴びせられた。成島中尉の意図はともあれ、万難を排して攻撃しなかったことは、結果として明らかな戦闘回避であり、軍令違反であると糾弾され、成島中尉は作戦失敗の責任者、軍令違反者として追求された。

成島中隊は、被害を最小限に止め、殆どの兵隊の生命を温存することが出来たが、聯隊、大隊の白眼視の中で、成島中尉自身は人生に想ひを残しつつ、自ら生命を断たねばならなかった……。

十六　犯罪

その日は、大隊長と副官は聯隊本部に行き、笹森が大隊本部の留守番をして、彼の直接指揮下の弾薬班、行李班は、揚陸作戦の港と、飛行場構築作戦とに、少数づゝ分かれて出動して居た。

敵機は今日も、三度波状攻撃をして来たが、大規模な爆撃ではなく、港と飛行場双方に爆弾を落とすと、簡単に引き上げてしまった。

敵は輸送路を絶って居るので、小型の貨物船一隻くらいが稀に入港しても、兵糧攻めの大勢に影響は無いと考へて居るのか、近頃は多数で執拗な攻撃をして来なかった。

笹森の作業部隊が、他の中隊より早く帰って来た。出迎へた笹森は、兵隊が何となく憂わし気で、而も引率して行った佐川兵長の姿が見えず、菅谷上等兵が指揮をして居た。

一応、全員が整列しての敬礼を受け、

「御苦労、解散」とその日の任務から解放すると、菅谷上等兵が「少尉殿――」と走り寄って来た。

その報告を聞くと佐川兵長は、揚陸作業を終わる頃、海岸の防空壕に独りで隠して置い

た梱包一ヶを持ち帰らうとして、貨物部隊の歩哨に発見され、逃げようとして格闘となり、駆けつけた憲兵に捕らへられて拘引されたとのことであった。

佐川兵長は体力に勝れ、温厚真面目な兵隊で、部下にも優しい男であった。現在、同じ班の兵隊二名が、何度目かのマラリアに罹り、高熱で食欲が無く、早く野戦病院に入院させて欲しいと笹森に具申し、笹森も軍医に頼み、病床が空くのを待って居る所であった。

佐川は作戦行動の往復に、森の中に椰子が芽を出して居るのを見つけると、分け入って持ち帰り、病兵の糧に廻したりする心遣ひを持って居た。

死線を共にして来た戦友の衰弱を見かねて、思ひ詰めた揚げ句の出来心が、佐川にそんな行動をさせたのであらうと、笹森は想った。

以前から梱包が破れて零れ落ちる食料は、拾って帰っても港湾部隊は見逃して居たが、梱包そのものを盗むなど、部隊で初めての犯罪であった。

戦地は、犯罪には安易な温床であった。揚陸した物資を、集団で計画的に実行すれば、一部を持ち去ることぐらひ容易であった。併し、決してそんな所業を行はぬ所に、日本軍の誇るべき規律と強さがあると笹森は思って居た。

笹森は本部の曹長に事件を告げ、白井副官に港の憲兵分隊に行ったとの報告を依頼して、匆々に宿舎を後にした。

作戦行動で兵隊と行軍する朝夕は、何の苦も無い行程であったが、雨季が明けたばかり

の泥濘の道を、独りで辿る一〇粁は遠かった。

揚陸作業を終わり、貨物を各隊に分散した港は、打ち寄せる静かな波の音ばかりで、灯火一つ見えぬ無気味な闇の世界になって居た。

各隊で配備して居る歩哨に訊ねて、漸く笹森は、憲兵分隊の駐屯地に着いた。居合わせた上長らしい伍長に、

「自分は今日、貨物を盗み出さうとして迷惑をかけた兵隊の、直接の上官だが、お詫びに来ました――」

と笹森は、伍長の顔色を見ながら挨拶をした。併し伍長は、知らぬ顔をして何も言はずに横を向いた。

「自分は生憎、他の用務でその場に居なかったのだが、部下から大略を聴いて、驚いて馳けつけたのだが……」

「それで、来てどうするんです?」

「罪を犯した佐川兵長には、当然、陸軍刑法が適用されねばならないけれど、せめて佐川の平常の軍務状態などを聴いて貰ひたいと……」

「?……」

「佐川は、同期で一番早く兵長に進級した、成績の優秀な兵隊で……、」

「少尉殿、愚痴や陳情は止めて下さい。必要が有ればうちの上官から呼び出しがあるでせ

う。自分は泥棒をする兵隊や、盗んだ物を喰ふ連中を取り締まる役目だけですから。」

笹森は憤然として、憲兵伍長を睨み付けた。併し、非はこちらに在るのだから、それ以上の論難は避けねばならなかった。

「それで、佐川は今、何処に？」

「面接には、許可が要るぐらい判って居るでせう――」

笹森は上級者の自分が部下の不始末の陳謝の為、下手（したで）に出て居るのを好いことに、不遜な態度をとり続ける伍長に腹が立った。暫く憲兵伍長を睨んだまま佇って居ると、その気魄に圧されたのか、

「森田一等兵、佐川は何処だったかなあ？」

と横を向いたまま呟いた。笹森は、

「此処の隊長殿に、罪を犯した佐川兵長の上官の、笹森少尉がお詫びに来たと、伝えて置いて貰ひたい。」

それだけ言って外へ出た。先刻から、心配顔で傍に居た森田一等兵が、後ろから蹤いて来て、黙々と密林の一隅を指さした。

「有難う、よろしく頼む。」

笹森は森田一等兵の厚意に感じて言った。

夜目にも鬱蒼（うっそう）とした巨木の間に、五つの衛倉が建って居た。獣の檻の様な、灯り一つ無

い闇の中に、人の気配が感じられた。独房の一つ一つに笹森は、声を殺して
「佐川、佐川……」と呼びかけて行った。三つめの前に立つと、
「笹森少尉殿、申し訳けありません、佐川であります――」と柵の間から手を出した。
「ああ、佐川、馬鹿なことをしたなあお前――。だが、今は何を言っても仕方ない。正直に自分のしたことを認め、お前が平常心掛けて居ることを、素直に取調官に述べなさい。そうすれば、お前の誠実な人柄を判って貰へるだろうから――。自分も、機会を得られれば、お前が立派な兵隊だったことを、証言してやるから……」
佐川は何も言えずに嗚咽して、笹森の手を握って居た。
「佐川、持って来てやる物が何も無いから、防蚊膏を持って来た。之を塗って、マラリアに罹らないようにしろよ。お前は元来、丈夫なんだから。」
佐川は一層強く、笹森の手を握った。
防蚊膏は、歩哨や衛兵が夜間勤務に立つ時に、被へない皮膚の部分に塗る蚊除けの薬であった。併し、蚊帳も何も無い土間の衛倉で、何日マラリアに冒されずに居られるやら――。
戦場での犯罪は、内地より幾重にも罪が加重するのだった。笹森が予備士官学校で習った陸軍刑法の記憶でも、佐川は、窃盗、上官暴行、歩哨線突破等罪として課せられる筈であった。

「申し訳ありません、少尉殿――」

佐川は何回もそれのみを繰り返して、なかなか笹森を離さなかった。

「では佐川、くれぐれも身体に注意をするんだぞ……」

笹森が手を離すと、佐川はまた、闇の中で鼻をすすった。

平時であれば、尋常な生活をして、立派な社会人である筈の青年が、分別を逸脱して土牢の様な衛倉に捕へられて居やうとは……。

戦場の環境が、罪を作ってしまったことが哀れであり残念であた。

恐らく二度と、佐川に会うことは無いであらう、此の事が彼の一生の汚点にならなければ良いが等、あれこれ考へ乍ら、月明かりを頼りに、笹森は重い足取りで帰隊した。

十七　回想

もの言はざるは腹ふくるるものなり、との兼好法師の徒然草の言葉を、その頃の笹森はいつも実感して居た。晝(ひる)も夜も、独りで居る時は焦燥感の様な鬱屈したものを感じて、気分が晴れなかった。

戦況は日増しに悪く、食料は欠乏して常時空腹を意識し、せめて存分に好きな話題を話し合へれば気が紛れると思ふのだが、日常の軍務や挨拶の会話以外に、腹の底からの話題を話し合へる相手が居らず、肉体的には常に空腹であったが、精神的には腹ふくるる毎日であった。

聯隊本部の主計下士官が文学部の出身者で、上海で購入して来た小説類を持って居たので、次々に借りて読んで了った。主として、阿部知二、丹羽文雄、石川達三、火野葦平等の作品だったが、之等を読むことが、随分、空腹の足しになった。

笹森は揚陸作戦に行くと、貨物を受領に来る各隊の経理部下士官に、その隊の主計将校の名前を訊くことにした。それは、笹森が經済学部の出身なので、仲間で主計将校になった者が多く、或は友人がウエワクの何処かに在隊しないかと云ふ儚(はかな)い期待からであった。

空しい問ひを続けて居た或る日、航空隊向けと一と目で判る水色の梱包を受領に来た下士官の返事が、

「若尾主計少尉殿であります」と想っても居ない姓を告げた。

「それで、その主計は、何処の学校の出身か識って居るかい？」

「はい、K大だと聞いて居ります。」

親友の若尾が、此の南海の涯に共に在隊するとは、急に眼の前が明るくなった気持であった。

「併し、若尾主計殿は、ラバウルに出張された折、乗船を撃沈され、幸ひ救助はされましたが、負傷してラバウルで入院して居られます――」

意外な現状であったが、脚の負傷で生命に別状はなく、近くウエワクに帰隊する予定とのことであった。

笹森は自分の部隊名と駐屯の場所を教へ、若尾が帰任したら必ず連絡する様にと伝言を依頼した。

若尾の消息を聞いて一ヶ月程の後、通信兵が

「笹森少尉殿、航空隊から電話が入って居ります」と伝へて来た。

取るものも取り敢へずに電話機にかぢり付くと、果して、

「笹森かい？　若尾だよ――」と元気な声が、野戦電話の雑音の中に聴き取れた。

昨日、航空機に便乗してラバウルから帰任し、下士官から笹森について聞いたのだと云ふ。笹森は次の日曜日に、揚陸作戦が無ければ休養することになって居たので、若尾の部隊を訪ねる約束をした。

その日、大隊長が気を利かせて、航空隊の宿営地は遠いからと、一日の外泊を許可してくれた。

現地の交通手段として、往来する軍用トラックに、將校と公用の腕章を巻いた兵隊は、手を挙げれば便乗出来ることになって居たので、笹森は十五粁の道程を乗り継いで、若尾の部隊に辿り着いた。

笹森の宿舎よりも、更に奥深い密林の中に、若尾は狭い個室を建てて居た。待って居た彼は、下草を踏み分ける笹森の足音に、飛び出して来た。

「やあ――」

二人はそれだけ言って、堅い握手をした。それ以上の言葉を加へなくても、大学入学以来六年間の友誼が、奔流の様に掌と掌に蘇った。

「怪我をしたさうだが、大丈夫か？」

「ラバウル沖で撃沈された時、脛に被弾したのだが、もう大丈夫だ。一ヶ月入院して居たので、却って休養になったくらひだ。」

土間の隣の寝所に上って、二人は脚を伸ばした。當番兵が、成熟した椰子の果肉を程良

く焼いて持って来た。
「秘蔵の酒が少し有るんだ。お燗が好いか、そのままが好いかい?」
「四ヶ月前に、恩賜の酒が少し配給された時以外、前にも後にも酒とは縁が無かったから、お燗をして貰って、悠っくり味わほう――」
蚊燻しの焚火の脇に飯盒を置いて、お燗をした。飯盒の蓋で、ちびちび含む酒の味が、五臓六腑に染み込んで行った。
二人は一別以来の体験を語り合った後、自然に学生時代の回想に移った。
「あの頃は、良かったなあ・・・」泌々と若尾が言った。
彼は早く両親と死別し、在学中は親族の家に起居して居た。文学や演劇が好きで、笹森と趣味が一致して居たが、若尾の方が実践的で、学内の文芸誌に参加したり、仲間と演劇活動をしたりして居た。笹森は、若尾の書いた芝居を観に行ったことがあった。
「君の芝居で主演した女子大生の女優さん、その後、どうした?」
笹森が訊くと、若尾はにやにやし乍ら内ポケットから、一枚の写真を取り出した。
「この娘だらう、実は、入隊が決ってから、婚約して来たんだ・・・」
演劇仲間として識り合った二人は、日を重ねるにつれ相思相愛となり、肉親に縁の薄い若尾に同情した彼女の両親が、屡々自宅に招いて饗応した。そして結局、入隊するなら話だけでも決めて置く様にと、若尾の親族も賛成して、正式に婚約を交したのだった。

「ラバウルの海に投げ出された時にも、彼女のことばかり考へ乍ら泳いだよ。俺は、どうしても彼女の為に、内地に還るんだ・・・」

若尾は冗談めかし乍ら、決意の様に言った。

「実際、あの頃は、佳かった・・・」

異口同音に、二人は同じ言葉を口にした。

学内の著名な教授の講義はいつでも聴けたし、学外からその時々の評判の学者、評論家を招聘して二、三時間の講演会が常時開かれた。

多難な時代に、学生は種々な論説を自分の撰択で自由に聴くことが出来た。笹森は屡々講演会を聴いて廻った。

スポーツに於ても、当時、WK大学野球試合は、天下分け目の決戦などと新聞が囃し立てた。

両大学ファンの女性の為に、銀座や新宿の店舗では、K大ファンの為にはカレッヂカラーのブルー、レッド、ブルーで彩った髪のリボンや、和服の帯〆、草履の鼻緒等を、W大ファンの為には茶色の同様な品を、特別製品として売り出した。

試合当日は、女性ファンが和服を着飾って妍を競ひ、球場の應援席は、お花畑の様になった。

K大がW大に勝って優勝した宵、笹森は現在はラバウルに居る筈の上野等と、銀座に繰

り出した。両側の店の多くは、〝祝K大優勝〟と幕　腕を組み、応援歌を歌ひ乍ら練り歩いて居たら、

「優勝、お目出度う御座います――」

と五人組の女性が寄って来た。皆お揃ひの三色のリボンで髪を飾って居た。

「有難う――」

笹森は、自分好みの美しい女性に手を伸ばした。女性は直ぐに応じて握手をしたが、二の腕が出るのを恥じらって、袖口を押さへて居た。

笹森はその愼しい優しさに強く惹かれた。そして、眼を見つめ合って、握った手を二、三度振った。お互の瞳に、煌めくものが感じられた。

学生やファンの人波が、怒涛の様に舗道を流れて来て、その浪に押された二人は、手を離した。

「お目出度う御座いました。お元気で・・・・」

「有難う。では・・・・」

それだけしか言へぬ、別れであった。

其後笹森は、銀座に出るたびに再会を期待したが、正に一期一会の女性であった。

当時、学生の間で新宿のムーランルージュの輕演劇に人気があった。浅草のエノケン一座と喜劇の人気を二分して居たが、笹森と若尾も交通に便利なムーランルージュの常連で

あった。

ムーランの文芸部には阿木翁助、伊馬鵜平等が居り、ユニークな名優左卜金、女優では竹下千恵子、外崎恵美子等を擁して居た。併し、学生のアイドルは、十代の可憐な明日待子であった。

知的でセクシーなウイットに富んだ台詞が多く、稀に菊池寛も見物に来ると云ふ噂であった。

入場料が一、二階共四十銭均一なので、中村屋で六銭の肉饅と四銭の餡饅(あんまん)を食ふのが通例で、ギザ（五十銭銀貨）一枚を持って出掛けたものであった。

プログラムの端に、ムーランに野球チームが出来たから、挑戦を待つとの記事があったので、早速、笹森のクラスで速成チームを作って申込むと、直ぐ快諾され、多摩川の貸グラウンドで試合の運びとなった。

勿論、明日待子が応援に来ることを期待しての挑戦であったが、狙ひは適中して、彼女は一座の若い女優と共に現れた。K大即席チームは、大いに張り切ったものだった。

併し学生生活は、東條内閣が出現する前後から、急に険しいものになって行った。

W大の学生が警察に狙はれ、晝間、大学近くの麻雀屋に居ただけで、学業放棄の名目で拘引され、新聞は〝学生狩り〟と称して大々的に喧伝した。

〝あの頃は良かった〟と云ふ自由闊達な時代が、だんだん遠くなりつつあった。

笹森と若尾は、僅かな灯の中で、心ゆくばかり語り合って、夜の更けるのも気付かなかった。二人の世界以外は、何も見えぬ密林の中でも、友人とは斯くも樂しく、充実した時間が持てるものだと、時間と空間を存分に堪能した。

語るに足る友人と会ひ、語り合へる時間に恵まれた将校の身が、笹森は衷心から有難かった・・・・。

十八　学徒将校

渕上少佐がラバウルの軍司令部附に栄転することになった。北支戦線に於ける武勲が評価されたのだった。

「笹森少尉、御苦労だが北の岬の海軍基地へ、儂の乗艦の打合せに行ってくれぬか」と少佐が言った。既に陸軍の航空隊には、ラバウルに飛ぶ制空権が無くなって居たので、海軍基地に来る潜水艦に便乗する様に軍命令が達せられて居た。

北の岬はウエワクの北端に在り、湾の出口に海軍の基地が在った。笹森は朝早く出発し、三十粁の道程を、トラックを乗り継いで行った。岬の入口に海軍の歩哨が立って居り、海辺の近くに、木造の瀟洒（しょうしゃ）な建物が建って居た。

戦前に定住して居たオーストラリア人の教会を、そのまま海軍が本部として使用して居たが、艦艇が常に碇泊することは無く、海、陸、空の連絡基地の役を果たして居て、要員も少数であった。兎に角、笹森のジャングル生活とは、正に別天地の趣であった。

よく爆撃を受けずに居ると、陸軍の部隊で噂をしたが、旧教会であることや、入港する貨物船の航路から外れて居たので、敵は敢て主たる攻撃目標にしなかった。

当番兵に要件を伝へると、直ぐ宿舎内の個室に案内された。待つ間も無く、体格の良いごつい顔をしたN中尉が、笑みを浮べて現れた。笹森はその様子から、彼も自分と同じ年度の卒業の、短期現役士官であらうと推察した。海軍は、同じ年度の卒業でも、直ぐ中尉に任官するのだった。

何となく娑婆っ気の感じられる言動で、

「宿営地からは、随分道程があったのでせう？　ひどい道を大変でしたね」と犒った。

「いえ、自分は歩兵ですから、歩くのは慣れて居ります」

彼等は、初めのうちは軍隊口調で応答して居たが、自然に地方（民間）言葉に砕けて行った。お互が求めて居た学生気風を久々に汲み取って、忽ち打ち解けた気分になった。

「此所は佳い環境ですね、場所と云ひ建物と云ひ、ウエワクに斯んな文化的場所があらうとは、想像もして居ませんでした。率直に言って羨しい限りです――」

笹森は更めて天井や扉を見廻した。

海軍は輸送手段を持って居るから、総てに於て贅沢だと、陸軍側が屡々非難するのだが現在の我が身を顧ると、短絡的なそんな不平も首肯されると感じられた。

「実は、ウエワクに上陸して以来、此所のコンクリートの床を踏む迄、反響する自分の靴音など、全く忘れて居ました。それで、ああこれは銀座の音だ、と途端に想いましたよ。」

「成る程、銀座の音、ですか――、自分なら多分、新宿の音と想ったでせうね。笹森少尉

は銀座が巣だったのなら、K大ですか？」
「さうです、N中尉はW大で？」
「さうなんですよ、奇縁ですね。WKが、こんな所で・・・」
海軍中尉は、更めて陸軍少尉と握手した。
笹森の卒業した中学は、名門と謂はれて、殆どの卒業生は国立かWKに進学したので、笹森は何人ものW大の友人を持って居た。それで、W大の開放的な磊落な校風が好きだったが、眼前のN中尉にも、屈託なく親しみを感じた。
重要な、渕上少佐便乗に関する打合せを終ると、
「今日中に帰隊すれば宜いんでせう、悠(ゆ)っくりして行って下さい――」
N中尉は、岬の岩陰に連れて行った。涼しい海の風が頬を撫でた。ポケットから飴玉を四ヶ取り出して、二ヶを笹森に握らせた。
「取って置きの、貴重品ですよ。舐め乍ら喋りませう――」
N中尉は彼の識る戦局や、日本国内の状況等を語った。流石(さすが)に、軍司令部と直接に折衝が有る海軍基地の士官は、ジャングル内に屏息(へいそく)する笹森より、遙かに国内外の情勢について多識であった。
「兎に角、大変な事態に成りましたね――」
「内地では、本土決戦に備へて女子が、竹槍の突撃訓練を始めたさうですよ」

「え、女性が竹槍で？」

「戦意高揚の目的かどうか判らないが、敵に知られたら物笑ひでせうがねえ。」

二人は暫く、南海の穏やかな海を眺め乍ら、数千粁離れた母国を偲んだ。

「戦争は嫌ですねえ。無駄で、残酷だ。」

「人類に対する冒涜ですよ」

「莫大な人間と文化の消耗であり、価値を生まない浪費ですよ」

「早く、平和な世の中にしたいですねえ」

「併し、斯う云ふ時代に青春を送るのも運命だから、頑張る以外に道は無いですね。ＷＫで、ウエワク戦線の勲功を競ひ合ひますか――」

半ば冗談めかした口調であったが、お互の眼は眞剣に光って居た。

「場所を得て、悔ひの無い戦死をし度いものです――」

「海陸で、ＷＫ共に頑張りませう――」

現状を直視した上での、詭弁でも誇張でもない、追ひ詰められた本心であった。

「陸さんは、補給が大変でせう、少しですが持って行って下さい」と帰り際にＮ中尉は、乾パン一袋と手拭を一本土産に渡した。

本来なら、挙手の礼を交して別れるのだが、Ｎ中尉は手を差し出した。

「思ひがけないＷＫ交歓が出来ましたね。若しも生命が在ったら、いつの日か銀座か新宿

で再会しませう。その時は二人共、スーちゃんを連れてね・・・」

戦場とは思へぬ朗らかな声で、二人が笑ったので、當番兵が吃驚して、振向いた。

敵の偵察機が一機、遠い空に長い飛行機雲を曳いて、去って行った。

N中尉は、岬の山寄りの地点迄、従兵にトラックで笹森を送らせた。

十九　奇　襲

貨物船が夜陰に入港するのも稀になった頃、航空機が飛来して、そのまま駐機する數が、目に見えて多くなった。

瞭(あきら)かに、ウエワク地区の空軍力増強であり、飛行場に翼を並べる友軍機を見渡すのは、頼母(たのも)しい限りであった。

敵の偵察機が、朝に夕に飛来しては、状況把握に努めて居る様であった。

併し、対空火力は既に徹底的に攻撃されて、補充増強が不可能の為、今では炸裂する高射抱や機関砲の音が、時々しか聞かれなくなって居た。

その日は快晴で、特別に暑い日であった。

笹森の作業部隊は、最近はジャングルの端を切り拓き、土嚢(どのう)を積んで飛行機の掩体(えんたい)場所の構築に全力を挙げて居た。

小さな円匙や鶴嘴(つるはし)の手作業なので、一機分の掩体を造るのに、幾日もかかる状態であったが、兵隊は増強した空軍に勇み立ち、直射する炎天下、汗を飛び散らせ乍ら精魂を傾けて居た。

突然、バリ、バリッと云ふ機関銃の音が、滑走路の端から起った。

振り向いた時には、ノースアメリカン戦斗機の星のマークが、眼前を掃射し乍ら、過ぎ去って行った。

そして、前の機影にぶつかりさうな至近距離で、次々と、疾風より早く敵機が通過して行った。全く稲妻の様な、奇襲であった。

敵機は超低空を、滑空状態でジャングルの梢を掠め、我が軍の監視体制に発見されずに飛行場に達すると、一斉にエンジンを吹かせて襲撃し、地上掃射を仕掛けたのだった。

機影も爆音も、全く捕捉出来ずに受けた奇襲で、敵の機銃音を聞いた時には、既に滑走路の先端の飛行機は、火にまみれて居た。

平素は、飛行場から何粁か離れた対空監視所で、常時非常態勢の警戒を敷き、敵の機影を発見すると直ちに本隊に連絡され、戦斗機は邀撃に出動し、爆撃機等の戦斗に加はらぬ航空機は、飛び立って雲の中に隠れたり、敵の攻撃圏外に去って居たが、此の日は全く対應の暇が無かった。

飛行場は、芝焼の野火の様に、点々と飛行機が燃えて居た。

笹森の一団は、六粁程宿営地から行軍して飛行場に着いたので、作業開始の前に十五分間の休憩をした。飛行場のことなので、強烈な南溟の太陽を避ける片陰も無く、兵隊は飛行機の翼の下で休んで居た。

丁度其の時に、一斉射撃を浴びたので、他部隊の何人かは退避の暇が無く、狙はれた飛行機と運命を共にした。

笹森は兵隊の配置を指揮して居て、飛行機から離れて居たので、二米の差で、掃射の標的にならずに済んだ。

危ふく被弾を免れ、椰子の陰に難を避けた笹森は、次々と襲ひかかる敵機を息を殺して凝視して居た。

ノースアメリカン戦斗機の濃い鼠色の機体が、浮塵子（うんか）の様に湧いて来て、恐らく何百機かの攻撃であったらう。航空機と航空施設を徹底的に攻撃した後も、暫くは後続機が飛来し双胴のロッキード戦斗機やグラマン機も続いて居た。

増強して居る日本空軍との決戦を回避する為、満を持しての先制攻撃であった様だ。

飛行場は、寸時にして火の海となり、血の池となった。

三十粁離れた一方の飛行場からも、濛々たる黒煙が、風に乗って漂って来た。海岸線に沿った直線上の飛行場なので、敵機は反復攻撃をすることなく、多数機を一挙に投入して、一と舐めに掃射を浴びせて行ったのだった。

遂に此の日は、應戦に発進する暇が無く、駐留して居た殆んどの航空機が、残骸を晒す結果になって了った。

笹森の部隊では、幸い戦死者は無く、脚に被弾した兵隊が四人居て、蔓草で急拵への担

架に乗せた者二名、他の二名は交互に肩に掴まらせて帰営した。

装備物量の差が、一瞬にして勝敗に決着をつける近代戦を目の当りにして、笹森は独り暗澹とした。土木機械類を装備して居れば、航空機の増援迄に、掩体壕を完備することが出来たのに、歩兵による円匙、鶴嘴の遅々たる作業が、今日の惨状を招いたのであった。

折角の、空軍力増強の戦略が、根本的に潰滅した一刻であった。

物量の差が、次第に戦局を深刻にして行った。

二十　捕虜

今回の輸送戦団は、三日前から敵の偵察機に発見されて居た。

潜水艦により洋上で沈没させる作戦を採らず、ウエワク入港まで攻撃を控えて居たのは、敵にそれなりの戦略があったらしかった。

船団は、最近では珍らしく二五〇〇屯級貨物船四隻で編成され、弾薬物資の窮乏を補ひニューギニア戦線の挽回を意図する作戦と推測された。

此の作戦を遂行する為に、船団自体も高角砲や高射重機関銃を配備し対空戦に備へて居た。陸上の残存する対空部隊も総力を挙げて攻撃態勢を敷き、且、貨物の揚陸作業も、迅速果敢に行動する様にと、緊急指令が出されて居た。

下級将校の笹森には知る由もないが、先般潰滅に帰した空軍力の増強は、此の日に備へてのものだったのでは、と想像された。

笹森の部隊は、深夜に出動準備を終り港へ向った。暁暗の中を港へ到着すると、続々と作業部隊が集結し、港湾部隊の指示に従って、夫々（それぞれ）の部処に黙々と黒い影を移動した。

薄明の海上に、小高い丘の様に、四隻の貨物船が碇泊して居た。

暗い浪間に、荷役の小型発動艇が活溌なエンジンを響かせて航く。陸上も海上も、燈火の無い無明の行動の中に、痛い程の緊張と決意が漲って居た。

敵の偵察機が二機、海上と陸上に照明弾を次々に落して行った。

遙るばる日本から来た四隻の船が、闇の中に全容を現し、一方、陸上の何千人かの作業隊全員が、姿を見せた。

高射砲が威嚇する様に、偵察機を攻撃した。此の日の戦斗の、開始であった。空が白みかけた頃には、荷役の舟艇が水馬の様に本船に取り付いて居た。平常より船が大きいので、沖での荷揚げに手間がかかったが、寸暇なく舟艇は往復した。陸地でも、肩に喰ひ込む重量物を、砂浜に足を捕られ乍ら瞬時を惜しんで運んで居た。

突然、勇ましい爆音を轟かせて、友軍戦斗機が発進して行った。過日の奇襲で大多数を失った残存勢力が、今日の戦斗に待機して居た。いよいよと思ふ間も無く、涛音に消され勝ちに、空襲ラッパが聞こえた。

間も無く、ダ、ダ、ダ、ダと云ふ友軍戦斗機の機関銃音が、空中各所に響いて、敵の爆撃機に突進して行った。

友軍機の何倍かの数の敵戦斗機が、爆撃機を援護して反撃する。

味方の温存して居た高射砲が一斉に攻撃を開始し、船自体からも、果敢な攻撃の火が見えた。入り交る銃撃の火花が、仕掛花火の様に大空に展開した。

一瞬、パッと火を吐いた一機が、錐揉みになって墜落して行った。敵か身方か、判別も出来ない空中の乱戦であった。

雷が落ちた様な、ダアーンと云う巨大な爆発音と共に、貨物船が噴火した。爆弾が、積荷の弾薬の集積に命中したのだ。天に沖する壮大な火の柱が、大小の炸裂音を伴ひ乍ら火花を散らした。

火焔の中に、右往左往する船員の姿が見える。船は、刻々、傾いて行く——。

辛くも降した救命艇で、負傷者が運ばれて来た。傷口が大きく割れて血が吹出して居る者、片腕を飛ばされて居る者、皆、血まみれで苦痛の呻きを上げて居た。

衛生隊が走り廻って、應急手当を施して行く。

南海の穏かな碧い海が、既に眞赤な血の地獄に化して居た。

最初に爆撃された船は、二つに裂けて一部を海上に曝すのみとなり、他の三隻も、火炎を何本も上げて居た。

繰り返し繰り返した阿修羅の闘ひが、空と海とで激突し、次々編隊で来襲した敵の爆撃機は多數の威力で海陸に戦果を挙げ、三時間に及ぶ戦斗を済ませて引き上げて行った。

燃える船には消火の手段も無く、負傷者の収容と、揚陸し得た貨物の分散に全力を挙げて居ると、今度は、海岸の端から再び、ダ、ダ、ダと機銃掃射が襲って来た。

海上から陸上へ攻撃の目標を換えて、新たな戦斗機群が作業隊に、一斉射撃を加えて来

た。作業に没頭して居た部隊は、不意を喰って逃げる暇がなく、端の方から倒れて行った。

ウエワクの総力を挙げた此の日の揚陸作戦には、歩兵部隊を主力に、港湾部隊、船舶部隊、航空地上部隊、経理部隊、朝鮮人の徴用部隊、インド兵の捕虜等、何処に駐留して居たのかと思ふ人数が集結して居たが、機銃掃射は見境も無く、人影を見れば射ちまくった。

友軍機は既に、海上での空中戦で当面の戦斗能力を使ひ果し、新たな敵への応戦がままならず、敵機の跳梁に任せるばかりであった。

戦斗機の後から、陸上への爆撃が始って、B17爆撃機が、五〇瓲（トン）の小型爆弾を虱潰（しらみつぶ）しに海岸線へ落しに来た。

浜辺は掘れば水浸しになるので、土嚢を積み上げただけの、掘立小屋の様な防空壕が、五〇米位の間隔で建って居た。

笹森の部隊も機関銃の音と共に、身を飜して防空壕に飛び込んだ。笹森が入った壕内には、既に三十名位が身を重ね合せて詰って居た。

闇に馴れた眼で見ると、日本兵も朝鮮の徴用者もインド兵の捕虜も、ひたすら何かに祈って居た。

百三十名の部下が、果して全員退避出来たか心配で、笹森は鉄兜の緒を締め直し、気配を窺って壕内から一歩外へ出た。

外は、爆撃と銃撃で硝煙が漂ひ、天地は暗灰色の世界に変って居た。

海上には、相変らず數本の太い火柱が、音を立てて燃えて居た。

急に、背後へ黒い影がかぶさったと感じたら、機影と機銃掃射が迫って来た。咄嗟(とっさ)に、壕内に飛び込もうとした笹森の前を、意志も意慾も失った様な捕虜のインド兵が、夢遊病者の様に通りかかった。

彼は、何れの防空壕も一杯で、入口は閉され捕虜の身として強引に割り込むことも出来ず、ただ呆然とさ迷って来たのだった。

笹森は我を忘れて、

Come in. Hurry up（早く入れっ）と叫び、腕を掴んで壕内に引摺り込んだ。

二人を狙った機銃弾が、砂煙を跳ね飛ばして、過ぎて行った。間一髪の避難であった。一瞬遅れれば、笹森も捕虜も、五体が蜂の巣の様になって居たか、木っ葉微塵に飛ばされて居たに相違なかった。

敵は大型の貨物船団を無事に入港させ、それに合せて動員されるウエワクの総兵力を、船と共に集中攻撃する作戦だった様で、海岸を逃げ迷ふ作業隊と、防空壕の一つ一つを狙って来た。笹森等が潜む防空壕も標的の一つで、機銃掃射に続き爆撃が迫って来た。

既に、空襲を連日体験して半年になる笹森は、爆弾慣れをして、危険の度合を察知出来る様になって居た。

B17爆撃機のブルン、ブルンと云ふエンジンの音で襲来の距離を察し、攻撃が始って落

下する爆弾の、風を切るザーッと云ふ音で何米位か近さを判断し、爆弾の尾翼が風に摩擦するヒュル、ヒュルと云う音が聞こへたら、全くの至近弾と覚悟せねばならなかった。そして、ヒュル、ヒュル音が壕を通り過ぎた時、漸く、ああ命中しなかったと、思ふのだった。

今日の壕内では、間断なくヒュル、ヒュル音を聞かねばならなかった。そして、至近弾が炸裂する度に、壕内の空気が圧縮されて、誰もが胸の圧迫で深い息を吐き出した。同時に、土嚢が破れて、砂を被った。

その間兵隊は、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱へ、「おっ母さん、おっ母さん」と叫ぶ者も居た。朝鮮の徴用者も大声で母国語の祈りを唱へ、インド兵は低頭を繰り返した。笹森もいつしか「南無妙法蓮華經」と繰り返して居た。

死の坩堝（るつぼ）に詰め込まれた三十名は、階級の上下も、勝者も敗者も、人種、宗教の別も無い、ひたすらに尊厳な生命の存続を祈る一団となって居た。生きた心地も無く、各人が夫々の祈りを捧げて居たら、漸くエンジンの音が遠去かり、掃射の音も聞こへなくなったので、笹森は状況を計って外に出た。

其所には、戦場の死臭が漂ひ、未だ燃え続ける船団の破裂音以外は、殺戮の終った後の、空しい静寂が澱んで居た。

笹森は壕内に向って、「もう、出ても大丈夫だぞ――」と声を掛けた。

辛くも死地を脱した者達が、疲れきった顔に、幽かな安堵の表情を浮べて、這ひ出して来た。誰も彼も、土砂を被って眞黒だった。

それ等の顔の中に、熱い視線を感じて笹森が眼を向けると、先刻のインド兵が、笹森を擬視して立って居た。

〝ああ、お互に助かったのだ――〟と云ふ意識で、笹森は黙ったまま同慶の手を差し伸べた。

Captain!（隊長ッ）と叫ぶと、インド兵は飛び着いて、両手で笹森の手を握った。

彼は眼を大きく開き、眞直ぐに笹森を見詰めたまま、手を離さなかった。

やがて其の上に、大粒の涙が、落ちて来た・・・・。

二十一　刺青

笹森は暇があると指揮下の弾薬班と行李班を巡察した。

将校の巡察には「敬礼」と、その場で気が付いた者が合図をして、居合せた者総ては起立して敬礼をするのが軍規であった。

その日も一斉に起って敬礼をする中に、一人だけ裸で居て、慌てて上衣を纏ふ兵隊が居た。

「誰だ？　今まで裸で居たのは」

「はい、大藪一等兵であります」

「お前は先日も裸だったな。マラニア対策上、上衣を脱いでは不可(いけない)と通達されて居るのを知って居るだらう。三十分後に俺の宿舎に来い」

笹森が舎内を見廻すと、隅の一角を仕切った場所に、松沢曹長が憮然として立って居た。松沢の所から大藪は、見えない死角ではあるが、いつも裸で居るのを松沢が知らない筈はなかった。

完全主義者の松沢と、規律を守らないことで自己主張を示さうとする大藪との、見えな

い確執を折々に感じて居る笹森であった。

松沢は夙に、部下としての大藪を見限って居た。併し、上級者、統率者としての松沢の対応にも、笹島は限界を感じるのであった。

笹森は敢て、大藪については觸れず、班内の模様を訊くだけで行李班に向った。軈て、

「大藪一等兵、参りました」

と大藪が宿舎にやって来た。一見して不貞腐れた態度であった。

「大藪、何故一人だけ軍規に反して裸で居るのだ？　暑いのは誰でも同じだ。併し、暑いだけでは死なないが、マラリアを重ねて居ると生命を失ふのだぞ。一枚の上衣を脱ぐ脱がないで、どれだけ涼しさが違ふのか、上衣を脱いで見ろ。」

大藪はしぶしぶ上半身裸になった。現れた裸身の両腕には、手頸から肩にかけて、見事な刺青が彫られて居た。笹森は、刺青のことは初めて識った。

彼は入隊前は腕の良い板前職人であったが、やくざの出入りに捲き込まれて刃傷沙汰を起し、傷害罪で服役した過去があった。その為、入隊後も年令が同期の兵隊より年嵩であり、自然に前科が周囲に判って白眼視され、段々、孤立した存在になって居た。

「大藪、粋がって、その彫り物を見せ度かったのか？」

「はい、それも有ります」平然と素直に肯定した。

笹森は大藪を暫くの間、凝視した。大藪もじっと笹森の顔を窺った。彼は笹森少尉の出

方を視て居た。

「大藪、此の紙で両耳に栓をしろ。そして歯を喰ひしばれ。」

笹森は生死の境に居る生活の中で体罰は好まなかった。併し意を決して大藪の両頬に、一発づつの平手打ちを加へた。

だいぶ効いた様で、大藪は左右によろめいた。

「どうだ大藪、これは今までの罰だ。今後一切、裸で居ないと誓へるか？」

大藪は笹森の表情に、個人的増悪も階級による制裁も無いのを察して、正當な軍律と自覚した。

「申訳けありませんでした。少尉殿に誓ひます――」

「よし――。鼻血が出た様だ。これで拭け」

笹森は紙片を渡した。一瞬、二人の間に一件落着と云ふ様な気配が流れた。

「そしてお前、立派なコールマン髭をして居るな」

「え？　何髭でありますか？」

「何だお前、自分の髭の名を識らないのか？」

「はい、写真を見て、格好が佳いので此の形にしたのであります。」

「それはな、ロナルド・コールマンと云ふアメリカの映画俳優が生やしたので、コールマン髭と云ふのだ。手入れが大変だらう？」

「いえ、鏡も鋏も持って居りますから。」
「暇な時には髭の手入れもいいけれど、銃や被服の手入れも忘れるな――」
「では少尉殿、此の髭を生やして居ても構はないのでありますか？」
「俺自身も仕方なく、斯うして髭を生やして居るから、お前に剃れとは云へないなあ。それにしても、お前の髭はなかなか似合って居るぞ――」
大藪はよく見ると、彫りの深い渋い顔をして居た。彼は初めの態度から、すっかり様子が変って居た。
「少尉殿の鬚も立派であります」
「俺は安全剃刀の刃が無くなり、鋏も待って居ないので、自然に伸びて了ったのだ。」
「でも、乃木大将の様に、立派な鬚であります。」
「馬鹿を言へ、俺の鬚には乃木大将の様に白い毛は無いぞ」
「少尉殿、自分が時々、鬚の手入れに来ませうか？」
「閣下の身分じゃあるまいし、一少尉の身で鬚の手入れに兵隊は頼まぬ。それよりも、お前の鋏を時々貸してくれ。鼻の下の髭が伸びて居るので、飯を食ふ時に髭も一緒に口に入って困るのだ。えだけでも切らせてくれ。」
「判りました。後で鋏を持って来ます」
笹森は生来毛深い方なので、口髭、顎鬚が大隊本部で一番伸びて居た。顎鬚は長い方が

格好が付くが、口髭は短いうちこそ額の汗脂で横に捻れたが、食物の関係で額に脂が出なくなり、髭は伸び放題で横に充分捻れず、海豹の髭の様で閉口して居た。

大藪は軍隊に入って、初めて憚(はばか)りの無い会話が出来た様に思へ、而も将校との会話なので特に嬉しかった。

彼はその時以降きちんと上衣を着た。そして時々、そっと笹森の髭を切りに来た。

或る日、島田一等兵が、

「少尉殿、大藪古兵殿が自分の身体を焼いて居ります」

と色をなして注進に来た。笹森が直ぐ弾薬班に行って見ると、宿舎の外で大藪が焚火をし、椰子の葉茎を燃やしては、我が身にその火を押し当てて、刺青を焼いて居るのだった。

「大藪、何をやって居るのだ？　火傷をするじゃないか――」

「心配をかけて済みません。刺青を消して居るんであります」

大藪は苦痛に堪え乍ら答へた。

「馬鹿だな、お前。そんなことなら、俺から軍医殿に頼んでやるのに」

笹森は仲間の軍医を呼びにやった。渡辺軍医が直ぐ衛生兵と共に来た。そして両頬に一発づつビンタを喰はせて、

「馬鹿者ッ、こんなことをして化膿したらどうするんだ。刺青を消し度いのなら、因幡の白兎の様に、全身の皮を剥いでやるぞ。医務室に来い――」

東北訛りの渡辺軍医が怒鳴りつけた。笹森と同期の軍医少尉で、口は悪いが親切な男であった。痛みに顔を歪めて大藪は蹤いて行った。軍医は衛生兵に手伝はせて消毒其他必要な治療を施して、叮嚀に包帯を捲いた。

「少尉殿、軍医殿、済みませんでした・・・。

自分は此の頃、自分の今迄の馬鹿さが判って来ました。

実は、墨を入れた頃から、自分は普通の人間ではなくなって行きました。そして、喧嘩沙汰を起したのです。

優しいおフクロが、刺青を見て、泣きました。そして、早く刺青を消しておくれって・・・」

大藪は遂に、周囲に憚らずに泣き出した。

「おフクロには苦労をかけましたから、せめて戦死をする前に、刺青を消さうと思ったのであります・・・」

笹森は、刺青を自分の存在価値として居た大藪が、自ら身を焼いて消す気になった心境の変化が、嬉しかった。

「よし、よし、其の志や可し。併し大藪、軍医殿に殴られる様なことはするなよ――」

笹森はそのまま不問にした。

松沢曹長が、終始無言で立って居たが、

「お手数をかけました――」

とだけ言って笹森に挨拶をし、大藪には振り向きもせずに去って行った。

二十二　最前線出動

ニューギニア戦線は、愈々緊迫して、ウエワク南方のマダン地区は、セピック河を挟んで敗戦を重ねて居た。

十二月に到って、河三五六四部隊は、此の劣勢を救援する為に、最前線へ投入されることになった。

遺書を書き、毛髪、爪を切り内地の関係者に遺す様にとの命令が発せられた。

併し此の遺品が、輸送の方便が無くなった現在、如何にして内地に届くのか、誰も半信半疑ではあった。既に、陸海空総てが殆ど敵に制圧され無線による交信以外は、全部連絡不可能な状況になって居た。海軍も潜水艦により転進撤退を終って居た。

夫々が思ひ思ひの時間に、爪を切り、戦友同士バリカンで頭髪を刈った。

いよいよ自分が此の世の肉親に遺せるものはこれだけに成ったと云ふ感慨が、爪と短い頭髪に篭められて、遺すべき相手の面影を想ひ出さずには居られなかった。どんな時に、如何なる懐ひで之を手にしてくれるのかと考へると、自分よりも受け取る人の不憫（ふびん）が身に浸みた。

そして一様に、厳粛な気持で自分の髪を手に取ると、もう遺骨すら故国には戻れない激戦地に向ふのだ、と云ふ決意が高揚された。

十二月十四日が、笹森の誕生日であった。其の日に、死地への第一歩を踏み出すのは、人生の深い宿命であらうと、笹森は長い遺書を父母に書いた。

ジャングル内の行動以外は、直ぐ敵機に攻撃されるので、密林の中に、一人が通れるだけの徑を拓き乍らの行軍をせねばならなかった。総力集結の方針からすれば、一兵残さず前線投入が理想であったが、密林と濕地帯を克服出来る体力の者以外は、足を踏み入れることは不可能であった。

大隊には百二十名程の行動に耐えられないマラリア患者と負傷兵が居た。残される者の不安な心理が、言動の端々に現れて居た。

軍司令部への部隊長の現状報告に対して、司令部から、ウエワクに残留隊を編成し、充分に統率し得る將校を隊長に任命すべし、との指令が届き、出発直前に、笹森少尉は残留隊長に任ぜられた。

笹森は、健康な肉体に健全な精神が宿る、と云ふが不健全な肉体の者ばかりの残留集団を、如何に精神面で健全に生活させ得るか、任務の重大さを痛感した。

前線への不安に包まれて出陣する仲間を、残留する不安で見送る兵隊を、笹森は更に別の不安で見廻すのだった。

日常生活を普通に過せるのは、班長の四名と衛生兵の二名、それに笹森の當番兵だけで他は傷病兵として遇せねばならなかった。

出陣の前々日に、笹森は自ら宿舎に松沢曹長を訪ねた。松沢は不審さうに、堅い表情で迎へ入れた。

「松沢曹長、一應、お別れだな。俺は曹長の歴戦の体験と、勇敢な責任感を頼りに思って居たのだが・・・。前線に出たら、充分に注意して存分に手柄を立ててくれ。」

笹森は終始、笑顔で話しかけた。松沢も態々笹森が出向いた気持と、自分を眞実評価してくれて居ると理解して、嬉しさうに笑顔を浮べた。

「そして松沢曹長、〝一將功成って万骨枯る〟と云う言葉も有　　部下の面倒も充分見てやってくれよ――」

松沢は一瞬、笹森の顔を窺ったが、

「はい、判りました・・・」と素直に答へた。暫く残存して居る装備備品等を話し合って、

「では曹長、武運を祈って居るぜ――」

「有難う御座います。少尉殿も、残留隊は大変でせうから、お身体に気を着けて下さい。」

笹森は出向いて良かったと思ひ乍ら、手を握った。

「それから少尉殿、部隊長殿の意向として副官殿から、残留隊は病人ばかりだから、少尉殿の當番に、緊っかりした兵隊をもう一名選ぶ様にと言はれて居りますが・・・」

「いや、今の島田一等兵が良くやってくれて居るから、自分のことは御心配なくと、部隊長殿には遠慮してあるんだ。」
「でもその達しがありましたので、広野一等兵に言って置いたのですが――」
「本人に伝へて了ったのなら、後で自分の所へ寄越してくれ。」
笹森が宿舎に戻って間も無く、広野一等兵が現れた。利巧そうな面貌で、入隊前は有力企業の工員をして居り、北支での軍旗祭では角力大会で優勝したこともある活溌な一等兵であった。
「広野一等兵、これから俺の言ふことに、遠慮なく答へる様に。お前も知って居る様に、俺は残留隊長として此所に残るので、部隊長殿が今後の状況を心配され、丈夫で優秀な兵隊を一人、當番兵に追加しろと仰言(おっしゃ)って、それでお前が候補になったのだ。自分としては、一兵でも多く前線の増強をして下さいと申し上げたのだが・・・。お前自身は、どっちを希望するか？」
少しの間、広野は考へて居たが、
「少尉殿がさう言って下さるなら、正直に申し上げます。自分は甲種合格で、家を出る時は近所の人々から歓呼の声で送られて入営しました。それですから、少尉殿が許して下さるなら、前線で、お国の為に戦ひ度いと思ひます。」
「判った。心配しないで前線に行ってくれ。」

笹森は、純粋な広野の気持に、一抹の憐憫を感じ乍らも感動した。
部隊全員が、死への門出と覚悟して、来る日が来たと堅い意欲に満ちて居た……。

二十三　残留隊の正月

昭和十九年（一九四四年）の正月が、一週間後に迫って居た。

聯隊長が心配して、傳令に残留隊の様子を見に来させたり、前線に行った大隊の動勢を報らせてくれたりした。

総てが不足不安の日常であったが、何とか気分を改め、明るい新年を迎へさせ度いと、笹森はあれこれ思案した。

残留隊の中に大藪一等兵が居た。彼はマラリアの経験はあったが、現在は行軍に耐えられぬ状態ではなかったのに、松沢曹長は再発の惧れを理由に、残留組の中に入れた。

笹森は、兎に角正月だけでも腹一杯にしてやらうと、島田一等兵に大藪を呼びにやった。

「大藪一等兵、元気か？」

「はい、別状ありません。此の通りであります――」

大藪は火傷の治った腕を振って見せた。

「それでは、大藪に頼みがあるんだ――、もう直ぐ正月が来るから、お前の板前の腕で、何とか隊内の者全員に、正月らしい物を作ってやってくれないか？」

大藪は忽ち眼を輝かせた。

「隊長殿、全部自分に任せてくれるんですか？」

「ああさうだ、島田を助手に附けてやるから。皆を喜ばせてやってくれ・・・」

「判りました。今日から直ぐに、準備にかかります――」

健康に支障のある者ばかりなので、特別な作業は課せられず、食料獲得探しにも行けず、名ばかりの狭い畑に種子を蒔いたりして、細々自活して居る残留隊に、正月増配の樂しみが喧伝（けんでん）されて、孤独だった大藪にも、仲間から期待の声がかかった。

大藪は毎日、島田と連れ立って、携帯天幕を風呂敷替りに、落ちて居る椰子を拾ったり、濕地の野菜を集めたり、魚の居る流れを堰止めたり、食材獲得に精を出した。

或る日、密林内の窪地に島田が瓢箪の様な果実を見付け、二人は早速採りに行った。

「島田、これはパパイアと云って、果実の王様なんだ。東京の果物屋でも一流の店でしか買へないもので凄く美味いんだぞ。未だ採るには少し早いが正月には熟し頃だらう。実が五箇生って居るから、隊長殿、軍曹、伍長、兵長殿二人に、大きいものから出せば宜い。パパイアにも階級が出来て了った・・・」

と大藪は笑った。島田は貴重な果実を見付けて、大藪が全く自分の口に入れることを考へぬ様子を見て、此の人は立派な兵隊なのだと心の中で感心した。

「島田よ、パパイアを一生に一度だけ喰って見ろ、俺が隊長殿に少し喰はせてやって下さ

いと頼んでやるから・・・」

「止めて下さい、そんなこと。言へば必ず隊長殿は分けてくれるでせうが、兵隊として自分一人だけ喰べる訳にはいきません。」

「さうか・・・、島田は感心だなあ・・・」

「何を言ふんですか、自分は、大藪古兵殿が偉いと思って居たのです。」

「何だって、俺が偉い？」

大藪は泌々と島田を見た。彼は入隊以来、年齢差や經歴から、援け合ひ、心を通じ合へる戦友が出来なかったが、初めて島田に心からの親しみと信頼を感じた。そして、

「島田よ、俺の本当の戦友になってくれよなあ――」と云って手を握った。

「勿論です、大藪古兵殿」

島田は大藪の真実の姿を識り、孤独だった大藪が気の毒に想へて、支へ合ふ戦友に成らうと心に決めた。

協同作業は愉しく進捗して、二人は大量の収穫を背負って帰っては、夜間に渋やあくを抜く工夫をし保存処理に没頭した。

元旦の朝、笹森は熱の高い者、傷の痛む者は床の中で遙拝する様に達して置いたが、八人が杖に縋って出て来たので、全員揃って、皇居を遙拝することが出来た。

遙拝に続く訓辞の中で、笹森は聯隊長からの伝令で、前進した戦友が無事にマダン地区

に到着し、計画通り配備に着いて居る旨を伝へると、一様に安堵の空気が拡がって、「あ良かった――」と口に出す兵隊も居た。

自分等が無事に正月を迎へ得ただけに、戦友の安否が気になって居たのだった。

式後の食事に、各班から使役を出し、大藪の指図によって、芋の葉の大皿に、椰子の刺身、沸騰して渋味を抜いた芋の煮ころがし、野菜の煮付、小魚の煮物等が、正月の特別料理として配給された。

四班の各班長が、笹森に挨拶に来たついでに、炊事場の大藪の許に寄って、

「大藪、パパイアは美味かったぞ――」

「大藪、今日は久しぶりに腹が一杯になったぞ――」

などと言って労を犒って行った。大藪は心から嬉しさふに、明るい表情で口笛を吹いて居た。

笹森は泌々と、日本軍隊の優秀性を痛感した。困苦の日常の中、熱に冒され空腹を抱え、負傷が痛んでも、敢て現状を呪ふ者など居らず、軍規は常に厳正に守られて居た。

日本人が単一民族であり、国民相互が反目し合ふ人種的、宗教的な偏見が無い為であらうと思ふのだった。

残留隊の中に、弱者同士の連帯感が拡がり、結束した団結心が、新たに芽生えつつあるのを、力強く笹森は感じ始めて居た。

二十四　發　病

体力も物糧も次第に限界に近付いて行った。併し笹森は、残留隊長としての責任の重さ以外には、現状に不平も不満も感じなかった。隊内が一致して、運命の轉回を待って居たからだった。それ以外に、方途が無い実状でもあった。誰もが、諦観の如くに、現世に生きる青年の、歩まざるを得ぬ宿命の道と思って居た。

時々笹森は、百三十名の兵隊を抱える隊長として、有り得る戦闘を予想せざるを得なかった。

残留隊には武器として、各人が歩兵銃と或る程度の弾薬、それに帯剣（所謂、牛蒡剣）を持つのみで軽機関銃は一挺も無かったし、笹森自身は軍刀一振のみで拳銃すら所持して居なかった。

若し敵が後方撹乱を意図してウエワクを攻撃したら、恐らく赤子の手を捻る様なものであらう。総て聯隊本部の指令のままに行動すれば良いのだが、本部と數十粁も離れた独立分隊の如き残留隊に、戦斗が始ってから過誤なく命令が伝達されることは不可能と思はねばならなかった。

其の時、病兵百三十名を如何に在らしむべきか、笹森は指揮官として誰からも非難されぬ責任者で在り度かった。

火器の無い傷病兵集団として、一旦ジャングル内に退避しても錯綜する密林内の魔境を全員が無事に退避することは絶対に不可能で、必ず脱落者が発生するであらうし、結局その者を見捨てることにならう――、然らば、集団での名譽の自決か――、或は傷病兵を鼓舞して、一斉に敵弾の中に突撃を敢行すべきか――、蟷螂の斧で、生きて虜囚の恥辱に遭ふ者が出ないで済むか――、笹森は部下の名譽の為、そして後日、その戦死を知る遺族の名譽の為、戦陣訓を念頭に、あれこれ想ひ悩む日が多かったが、その憂ひを部下の前で見せる事は禁物で、常に明るく振舞ふ様に心掛けた。

部隊の中では、最后までマラリアに罹らないで居た笹森が、遂に劇しい悪感と高熱に襲はれた。

兵隊が高熱に冒されて、深夜に奇嬌な大声で叫び出したり、呻き声が聞こえたりすると、宿舎を出て見廻はらねばならぬ心労の日常が重って、心身の無理が累積した結果であった。

衛生兵に無理矢理に野戦病院へ連れて行かれた笹森は、マラニアが相当進行し、既に肝臓が大部肥大して居て、そのまま入院を言ひ渡された。

病院と云っても、風通しの良い岬の端に、赤十字の旗を立てただけの、集団隔離区域で、外傷なら相応の手当を受けられたが、マラリア患者には、蚊の少い地域と云ふだけで、軍

医にも特に施すべき医療は無かった。

将校用の個室を島田一等兵と共用で当てがはれて、笹森は急に、心の張りが薄れるのを自覚した。入院して了ったからには、隊内を巡視することも無く、病兵に問ひかけることも出来ない——。自分独りの斗病に恵念する以外に、為すべき事が無いと云ふ解放感と虚脱感が、病状を促進した様にも思はれた。

笹森のマラニアは悪質な熱帯熱で、十日間も四十度を越す発熱が続いた。併し、島田一等兵が冷い手拭を頻繁に替へたり、食物の採集に勉めて食事に気を配ったり、献身的に出来る限りの看病をしたので、熱に浮かされて正気を失ふことなどは一度も無かった。

高熱と戦って居る折、軍医中尉が病舎に来て入念に診察した後、

「貴官はK大の出身ださうですね。私は此の病院の森尾と云ふんですが、同じK大なんですよ。時々診に来ますから、気長に斗病をして下さい——」

森尾中尉は親切にさう言って、長居をせずに帰って行った。笹森は態々出向いての検診と親身な扱ひに、地獄で佛に遭った様な安らぎを感じた。

野戦病院には、笹森の部下八名が既に入院して居た。島田の報らせで、彼等は次々に見舞に来た。誰も懐しさうに少時間話して行ったが、二名は健康を取り戻し退院間近と言って居たが、六名は痩せて見違へる程に衰弱しして居た。

そして一名は、數日を經ずして世を去った。笹森は隊の兵隊を呼び集め、懇ろに茶昆に付した。

農家の出身で、妻子の有る実直な兵隊であったが、隊長である笹森が直接手を下して弔へたことが、眞面目な軍務に幾らか酬ひ得たかと思ふのだった。

森尾中尉は其後多忙で顔を見せなかったが、中尉の當番兵が島田の所へ、時々椰子の実や芋を少量届けてくれた。

熱帯熱が下って、元の気力が戻ったので、笹森は森尾軍医を訪ねてお礼を言ひ、是非退院させて欲しいと頼んだ。軍医は呆れた様に笹森を見て居たが、一応悠っくり診断して、

「駄目、駄目、今は潜伏期間の様なもので、迚も退院出来る容態ではない。無理をしたら直ぐ前以上に発熱しますよ。」と強い口調で言った。

二、三日後の夕方、勤務を終へた森尾が、笹森の病舎を訪ねた。

「どうです？　熱の具合は」

「有難う御座います。お陰様であれから熱は出て居ません」

森尾は笹森の頬に手を当てて、

「まだ七度五分位はありますな。どうです、気分が悪くなければ、海岸に出て見ませんか」

と誘った。笹森は直ぐに応じて、三十米程離れた海岸に出た。

「これを、おあがんなさい」

森尾は二粒の栄養食を渡した。栄養食は、軍隊で作って居る薬用菓子で、蜂蜜、黄卵、緑茶等を固めた物であった。笹森は厚意に感謝して直ぐ一粒を口に入れた。久々に味はう美味であった。

「笹森君は十六年の卒業でしたね？」

「さうなんです。軍医殿は？」

「あなたの十数年も先輩になりますなあ。どうです最近の母校は？」

笹森は、学生に対する文部省の規制が多くなったり、出版物の検閲が強化されたり、繰上げ卒業のこと等から、東京の一般の生活物資の様子等を詳しく話した。

森尾軍医中尉は、郷里で開業して居る所に二度目の召集が来ての應召であった。

「森尾さんは、母校に校歌が出来たのを御存知ないでせう？」

「さう云へば応援歌は幾つも有ったが、校歌の記憶は無いなあ・・・」

笹森は、昭和十五年に発表された校歌の一節を聞かせた・・・

わが手に執れる炬火（かがりび）は
　叡智の光あきらかに
ゆくて正しく照すなり
　征かんなこの道を
強く正しく征かんかな

森尾は目を瞑じて聴いて居た。種々な学生時代や内地での生活を想ひ興して居る様であった。笹森も覚えて居た歌詞を更めて戦場で歌って、泌々と感慨に浸った。

そして、古い歴史の母校が有難く、識り合って幾日も經たぬ先輩に、兄弟の様な親近感を覚えた。森尾も同じ懐ひの様子であった。

熱帯魚の見える南の海は、その時、穏やかで平和であった・・・・。

二十五　病院船

その後十日程して、笹森の小康状態が急変した。

熱は三十八度位しか上らなかったが、頻繁な下痢を起し、二日後には一日に二十回位、便所に行かねばならなくなった。而も碌に食物を攝って居ないので、大便は血液のみを排泄した。

十米程離れた便所の囲いに行くにも、体力の消耗が加はる感じであった。森尾軍医はマラリア赤痢と診断したが、野戦病院には既に、其の為の薬が皆無であった。

島田の肩を借りて便所に往復し、排便の跡に島田が土を被せた。

体内の血を絞って排泄するので、肉体の衰弱が日毎に自覚された。

笹森は、病魔に負けてはならぬと自分に言ひきかせ、気力を絞って、堅い病床に横臥して居た。

そんな状態の時に、病院船が、ウエワクに入港した。

二ヶ月程前に、東京から参謀総長がニューギニアを視察に来たとの噂が傳って居た。

当時日本軍は世界的に識られた優秀な司令部偵察機を持って居た。司偵（と呼ばれて居

た）は非常に速度が速く而も航続力に優れて居たので、敵の戦斗機が発見しても追跡して攻撃することが不可能だと云はれて居た。

その司偵を使ってニューギニア戦線を視察した参謀総長が、食糧、弾薬の窮乏やマラリア患者の惨状を実見して、補給する方策の立たぬ劣勢の中、せめて病院船を送らうと、参謀本部として決定したのであった。

高熱と疲労で、うとうと眠って居た枕元に、森尾軍医が歩を運んだ。

「笹森少尉、判っきり言って、此所に居れば先が知れて居る。兎に角、病院船に乗りなさい。そして、乗船したら直ぐに病状を軍医に訴へて、薬を貰ふ様に。多分、病院船には即応する薬が有る筈だから・・・」

森尾軍医の行届いた注意を受けた後、送還が決定した。

少しでも多く収容し度い病院船には、治癒の見込みの無い絶望的患者は乗せなかった。それ故に、「兎に角、乗船する様に」と云ふ軍医の言葉に、笹森は自分の病状の眞実を聴かされた思ひだった。

赤十字の標識を描いたトラックに乗せられて、野戦病院を後にした。

軍医も衛生兵も、歩ける患者は皆集って、搬送する三台のトラックを見送って、手を振った。去る者、残る物、共に複雑な懐ひであった。

笹森の部隊の七名も、夫々の病舎から出て来たが、お互に近寄って、言葉を交す体力も

時間も無いまま、相互に眼を瞠め合ひ、僅かに手を振って、盡きぬ別れの挨拶とした。

泥濘の路に揺られ乍ら、毎日通った飛行場が、遠去かって行った。

飛行場や海岸での作業中に、戦歿した誰彼の面影が、走馬燈の様に、浮んでは消えた。

ジャングルのあの辺りが、自分等の宿営地だと想ふと、部下に一目でも会って行き度い思ひで、胸が迫った。

何とか頑張って欲しい、何とか生き抜いて貰ひ度い――、それだけが彼等への、笹森の願ひであった。

港には、病院船橘丸が碇泊し、既に煙突から煙を出して居た。赤十字の標識が鮮やかな、白鳥の様な船で、笹森には平和のシンボルの様に感じられた。

島田一等兵に緊っかりと背負はれて、船橋を上った。船内には、遮蔽の無い電球が、煌々と輝いて居た。

太古の世界から、一気に文明の世界に抛り込まれた感じであった。

無駄な物を総て取り拂った、広々とした船内に、煙草の吸殻入の様な四角の筒が、急な排便様に配置されて居た。衛生兵が笹森の病状に合せて、その筒の傍に病床を決めた。

周囲の將兵は殆どがマラリア系の患者ばかりで、誰もが骨と皮ばかりの身体であった。

笹森は、自分もあんな姿か、もっと酷い姿であらうと推量した。

直ぐ下船しなければならない島田の手を、笹森は握った。

「島田、随分お世話になった、ほんとに有難う。今日、こうして病院船に乗れるのも、島田のお陰だよ。何日までも、親切は忘れないよ・・・」

「自分こそ、隊長殿には良くして頂きました――、病院船には良い薬が有るさうですから、早く快くなって下さい」

「部隊の皆に会へずに、このまま一人で先に帰るのは、全く申訳ないが、島田から、くれぐれも宜敷く伝へてくれ・・・」

「隊の人々も、隊長殿が無理を重ねて重態になったことを知って居ますから、病院船で帰られたことを喜ぶと想ひます。ただ、現地に隊長殿が居られないのは、心細く淋しく思ふでせうけれど・・・」

病勢と急な乗船に取り紛れて、聯隊本部と別離の挨拶をしなかったことに気が付いた。せめて病院の通信を借りて、聯隊副官と後任残留隊長の打合せだけでもしなければならなかったと、乗船した余祐で後悔し、慙愧（ざんき）の念に捉はれた。

「島田、隊の皆に、自分はいつも皆の武運を祈って居るから、と伝へてくれ」

笹森は握って居た島田の手に、更めて力を篭めて別れとした。

島田一等兵は、農家の出身で小学校しか出て居ない兵隊だが、実直誠実で頼りになる兵隊であった。笹森は、非常時日本の為に、斯る有為な青年を内地に連れて帰り度かったが、死地に遺さねばならぬのが日本の現実だと思ふと胸が痛んだ。それは、如何ともし難いさ

さやかな笹森の願望に過ぎなかった。

乗船した患者が甲板に出て、戦友に手を振り、或は周囲のジャングルを見廻して、感慨に耽って居た。

船と陸上の、盡き無い思ひを振り切る様に、高く長く、別れの汽笛が鳴った。

島田一等兵の、きちんとした挙手の敬礼が見えたので、笹森も挙手を返した。

病院船と直ぐ識別出来る様に、全部の照明を点けた船が、静かにウエワクを出航した。

兵火が無ければ、何千年も静謐なままの密林の平和そのものの影が、眠って居る様に薄らいで行った。

瀕死の戦地から離脱して、国際法に守られた安全な船で、今、自分は去って行く……。後には、生死を共にする覚悟だった百余人の部下と、更に前線には、何千人かの戦友が死線にさ迷って居る……、あれこれを思ふと、笹森は自分の運命の有難さと、反面の申訳けなさとで、胸が一杯になった。

數千年の歴史を持つ人類の叡智が、何故総力を傾けて殺し合わねばならないのか、何故お互の国同士が繁栄の為の「握手」が出来ないのか……と、穏かな南海の病院船で思って居た……。

昭和二十年（一九四五年）八月十五日に終戦となり、二十一年三月に、河三五六四部隊の将兵が、浦賀港に帰還した。

最後迄、ニューギニアで転々とし、生命を保ち得て此の日に故国へ上陸出来た笹森の戦友は、将校二名、兵隊十七名であった。

そして、ニューギニアに出征した河部隊（第四十一師団）約二万人の内、終戦時に戦地で生存して居た将兵は、六百人に満たなかったと云ふ‥‥。

了

「握手」の出版にご協力いただいた方々

（敬称略）

松井彩子
松野進
光永專一
湊博子
宮脇白夜
村上有秋
望月正午
矢島龍雄
矢野たま
山名愛三
山本臣一
和田啓子

この度は、「握手」の出版に、ご支援、ありがとうございました。おかげで出版に漕ぎ着けることが可能となりました。ハードカバーの豪華本という訳にはいきませんが、シンプルで読みやすい本が出来たと、著者をはじめスタッフ一同喜んでいます。

本当にありがとうございました。

「握手」の出版にご協力いただいた方々

（敬称略）

青木耀子
荒井久美子
荒井肇
荒澤信三郎
伊東肇
岩波浩吉郎
鵜飼質
宇田川朝司
大島民郎
岡崎定助

各務千枝子
笠原祥郎
上村政為
岸田務
木原喜美江
櫛見充男

小泉栄一
小泉準藏
小倉純
小林忠好
小堀善一郎

坂上弘
佐々木優
佐藤をさむ
佐藤吉之輔
鈴木貞雄
鈴木任子
芹澤宏
高井弘満
高橋達人
武田次代

塚本清士郎
津久井和男
遠山浩次
富田直治

中川正澄
中谷五秋
練馬区立小竹図書館

橋爪鶴麿
浜四津敏子
林白風
藤木とみや
布目谷三津子
古川芳成

益子みのる

佐々木衛士(ささきえじ)
本名　佐々木衛(ささきまもる)
住所　東京都練馬区羽沢１丁目５－４
俳人協会会員　俳誌「若葉」同人　慶大俳句友の会会員
随筆「掌」が日本エッセイスト・クラブによる
「77 年ベストエッセイ」 に選ばれる。

握　手　－抄録ニューギニア戦線 -

2001 年 11 月 3 日　発行

著　者 —— 佐々木衛士
発行者 —— 田中久雄
発行所 —— 株式会社かんぽう
大阪市西区江戸堀１丁目２番 14 号（〒 550-0002）
電話……(06)6443-2171 ／ FAX……(06)6443-2175

印刷／製本……株式会社 淀川工技社

©2001 Printed in Japan　無断転載を禁じます。